	7	8	9	10	11	12	13	14	15		16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
ナシ	むかしおとこありけり京にありわびて	むかしおとこ有けり京やすみうかりけん	むかしおとこありけりそのおとこ身を	むかしおとこ武藏のくにまで	昔おとこあつまへゆきけるに	むかしおとこ有けり人のむすめを	昔武藏なるおとこ	むかしおとこみちのくにゝ	むかしみちのくにゝてなでうことなき		むかしきのありつねといふ人	年ころをとつれさりける人の	むかしなま心ある女	昔おとこ宮つかへしける女の	むかしおとこやまとにある女を	むかしおとこ女いとかしこく	むかしはかなくて	むかしゐなかわたらひしける人の	むかしおとこかたゐなかに	むかしおとこ有けりあはしとも	むかしおとこ五條わたりなりける女を
ナシ	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
ナシ	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
ナシ	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
ナシ	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	ナシ	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
昔をとこありけり女をぬすみて	同	むかしおとこ有けり京 やすみらかりけん むかしおとこありけり そのおとこ身をノ二段 ヲ合セテ一段トセリ		同	同	同	同	同	同	昔みちのくにゝ男すみけり	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	ナシ

27	昔おとこ女のもとに	同	同	同	同	同	同	同	同
28	昔いろこのみなりける女	同	同	同	同	同	同	同	同
29	むかし春宮の女御の	同	同	同	同	同	同	同	同
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	昔男女手洗而			
30	むかしおとこはつかなりける女の	同	同	同	同	同	同	同	同
31	昔宮の内にて	同	同	同	同	同	同	同	同
32	むかし物いひける女に	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
33	むかしおとこつのくに	同	同	同	同	同	同	同	同
34	むかしおとこつれなかりける人の	同	同	同	同	同	同	同	同
35	むかし心にもあらて	同	同	同	同	同	同	同	同
36	昔わすれぬるなめり	同	同	同	同	同	同	同	同
37	昔おとこ色このみなりける女に	同	同	同	同	同	同	同	同
38	むかしきのありつねかりいきたるに	同	同	同	同	同	同	同	同
39	むかし西院のみかと	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
40	昔わかきおとこ	同	同	同	同	同	同	同	同
41	昔女はらから	同	同	同	同	同	同	同	同
42	昔おとこ色このみとしる〳〵	同	同	同	同	同	同	同	同
43	むかしかやのみこ	同	同	同	同	同	同	同	同
44	むかしあかたへゆく人に	同	同	同	同	同	同	同	同
45	むかしおとこ有けり人のむすめの	同	同	同	同	同	同	同	昔みやつかへしける男 昔すきものゝこゝろはゑありト 二段ニ分ケタリ
46	むかしおとこいとうるはしき友	同	同	同	同	同	同	同	ナシ

47	むかしおとこねんころに	同	同	同	同	同	同	同	同
48	昔おとこ有けりむまのはなむけ	同	同	同	同	同	同	同	同
49	むかしおとこいもうとの	同	同	同	同	同	同	同	同
50	昔おとこ有けりうらむる人を	同	同	同	同	同	同	同	同
51	昔おとこ人のせんさいに	同	同	同	同	同	同	同	同
52	むかしおとこありけり人のもとより	同	同	同	同	同	同	同	同
53	むかしおとこあひかたき女に	同	同	同	同	同	同	同	同
54	昔おとこつれなかりける女に	同	同	同	同	同	同	同	同
55	むかしおとこ思かけたる女の	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
56	むかしおとこふして思ひ	同	同	同	同	同	同	同	同
57	昔おとこ人しれぬ物思ひけり	同	同	同	同	同	同	同	同

58	むかし心つきて	同	同	同	同	同	同	同	同
59	むかしおとこ京をいかゝ思ひけん	同	同	同	同	同	同	同	
60	むかしおとこ有けり宮つかへいそかしく	同	同	同	同	同	同	同	同
61	昔おとこつくしまて	同	同	同	同	同	同	同	同
62	むかし年ころをとつれさりける女	同	同	同	同	同	同	同	同
63	むかし世こゝろつける女	同	同	同	同	同	同	同	同
64	昔おとこみそかに	同	同	同	同	同	同	同	同
65	むかしおほやけおほして	同	同	同	同	同	同	同	同
66	むかしおとこつくにゝしる所	同	同	同	同	同	同	同	同
67	むかしおとこせうえうしに	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
68	昔おとこいつみのくにへ	同	同	同	同	同	同	同	同

69	むかしおとこ有けりそのおとこ伊勢のくにゝ	同	同	同	同	同	同	同	同
70	むかしおとこ狩の使より	同	同	同	同	同	同	同	同
71	昔おとこ伊勢の齋宮に	同	同	同	同	同	同	同	同
72	むかしおとこ伊勢のくにになりける女	同	同	同	同	同	むかしそこにはありときけと	むかしそこにありとはきけと	昔そこにありときゝけれと
73	むかしそこにはありときけと	同	同	同	同	同	むかしおとこ女をいたうゝらみて	むかしおとこをうなをいたううらみて	むかし女をいたくうらみて
74	むかしおとこ女をいたうゝらみて	同	同	同	同	同	むかしおとこいせのくにゝゐていきて	むかしおとこいせの國にゐていきて	むかし男伊勢國なりける女に
75	昔おとこ伊勢のくにゝゐていきて	同	同	同	同	同	むかしおとこいせのくにゝありける女を	むかしおとこ伊勢の國にありける女を	むかし男伊勢國なりける女を
76	むかし二條の后のまた	同	同	同	同	同	同	同	同
77	むかしたむらのみかと	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
78	むかしたかきこ	同	同	同	同	同	同	同	同
79	むかしうちのなかに	同	同	同	同	同	同	同	同

80	昔おとろへたる家に	同	同	同	同	同	同	同	同
81	むかし左のおほいまうちきみ	同	同	同	同	同	同	同	同
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	あめのいみしうふりくらして	あめのいみしうふりくらして	ナシ
									昔ふかくさの御門
82	むかしこれたかのみこ	同	同	同	同	同	同	同	昔これたかときこゆるみこト昔をなしみこ二段ニ分ケタリ
83	むかしみなせに	同	同	同	同	同	同	同	同
84	むかしおとこ有けり身はいやしなから	同	同	同	同	同	同	同	同
85	昔おとこ有けりわらはより	同	同	同	同	同	同	同	同
86	昔いとわかきおとこ	同	同	同	同	同	同	同	同
87	むかしおとこ津のくにむはらのこほり	同	同	同	同	同	同	同	同

88	昔いとわかきにはあらぬ	同	同	同	同	同			
89	むかしいやしからぬおとこ	同	同	同	同	同	同	同	同
90	むかしつれなき人を	同	同	同	同	同	同	同	同
91	むかし月日のゆくをさへ	同	同	同	同	同	同	同	同
92	むかしこひしさに	同	同	同	同	同	同	同	同
93	むかしおとこ身はいやしくて	同	同	同	同	同	同	同	同
94	むかしおとこ有けりいかゝありけむ	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
95	むかし二條の后に	同	同	同	同	同	同	同	同
96	むかしおとこ有けり女をとかくいふこと	同	同	同	同	同	同	同	同
97	むかしほり河のおほいまうちきみ	同	同	同	同	同	同	同	同
98	昔おほきおほいまうち	同	同	同	同	同	同	同	同

99	むかし右近の場馬の	同	同	同	同	同	同	同	同
100	むかしおとこ後涼殿の	同	同	同	同	同	同	同	同
101	むかし左兵衛督なりける	同	同	同	同	同	同	同	ナシ
102	むかしおとこ有けりうたはよまさりけれと	同	同	同	同	同	むかしおとこみこたちの	むかしおとこみこたちの	昔男みこたちの
103	むかしおとこ有けりいとまめに	同	同	同	同	同	むかしあてなるおとこありけり	むかしあてなるおとこありけり	昔なまあてなる男のもとに
104	むかしことなることなくて	同	同	同	同	同	むかし女ひとの事を	むかし女人のこゝろを	昔をむな人のこゝろを
105	むかしおとこかくてはしぬへし	同	同	同	同	同	むかしおとこありけり歌はよまさりけれと	むかしおとこ有けり歌はよまさりけれと	昔男ありけりうたはたよまさりけれと
106	昔おとこみこたちの	同	同	同	同	同	むかしおとこありけりいとまめにて	むかしおとこありけりそのおとこいとまめにて	昔男ありけり深草御門に
107	むかしあてなるおとこありけり	同	同	同	同	同	むかしことなる事なくて	むかしことなることなくて	昔ことなる事なくて
108	むかし女ひとの心を	同	同	同	同	同	むかしおとこかうてはしぬへし	むかしおとこかくてはしぬへしノ一部アリ	昔男かくてはしぬへし
109	むかしおとこともたちの	同	同	同	同	同	同	歌ノミアリ	同

110	むかしおとこみそかに	同	同	同	同	同	同	同	同
111	昔おとこやむことなき女のもとに	同	同	同	同	昔貴人之許爾昔男顔強借計流人之許爾ト二段ニ分ケタリ	同	同	同
112	むかしおとこねむころに	同	同	同	同	同	同	同	同
113	昔おとこやもめにてゐて	同	同	同	同	同	同	同	同
114	むかし仁和のみかと	同	同	同	同	同			
115	むかしみちのくにゝておとこ女	同	同	同	同	ナシ	ナシ		
116	むかしおとこすゝろに	同	同	同	同	同	ナシ		ナシ
117	むかしみかと住吉に	同	同	同	同	同	ナシ		ナシ
118	昔おとこひさしくをともせて	同	同	同	同	同	或本有之トシテ入レタリ	ナシ	同

119	むかし女のあたなる	同	同	同	同	同	或本在之トシテ入レタリ		同
						むかしいとわかき人にはあらぬ	むかしいとわかき人にはあらぬ	昔いとわかき人にはあらぬ	
120	昔おとこ女のまた世へす	同	同	同	同	ナシ	同	同	同
121	むかしおとこ梅壺より	同	同	同	同	同	同	同	同
122	むかしおとこちきれること	同	同	同	同	同	同	同	同
123	むかしおとこありけり深草に	同	同	同	同	同	同	同	同
124	むかしおとこいかなりける事を	同	同	同	同	同	同	同	同
						むかし仁和寺のみかと			
125	むかしおとこわつらひて	同	同	同	同	同	同	同	むかしおとこ京をいかゝ思ひけんむかしおとこわつらひてノ二段ヲ合セテ一段トセリ
						（皇太后宮越後本）			

						むかしみかとすみよしに	むかし御門すみよしに	ナシ
					ナシ	むかしみちのくにゝをとこ女	むかしみちの國にておとこ女	
						むかしすゝろにて	むかしすゝろにて	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ		むかし女をぬすみて	むかし女をぬすみて	
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこ女をきふし	むかしおとこ女をきふし	ナシ
						むかし仁和のみかと	むかし仁和の御門	
							むかし女あたなる男の	
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	いまの長願寺といふ所に	ナシ	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ		むかしいろこのむ人ありけり	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこある人にしのひて	ナシ	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかし色このみたへにし人の	ナシ

ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしありけるいろこのみける女	ナシ	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこきてかへるに	ナシ
						むかしいろこのみなる女に		
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこならの京に	むかしおとこはるかなるほとに	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ		ナシ	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこはつかなりける女の	むかしもの思ふおとこ	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ		むかしおとこえうましかりける人を	ナシ
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ		むかし男有けりわりなきことを	ナシ
						（小式部内侍本）		
						むかしおとこ女をうらみて		

	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	をなしおとこ女のうゐもきけるに	ナシ	ナシ
							むかしおとこなくなりにける女を		
						ナシ	むかしみちのくにゝおとこ女		
							むかし二條の中宮に		
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	このことをきゝて		ナシ
							むかしすゝろにて		ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこならの京に	ナシ	ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこえあふましかりける人を		ナシ
							むかしおとこすゝろなるみちを		
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ		むかしおとこ女をぬすみて		
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこすゝろなるところに	ナシ	ナシ

							むかしわすれぬるなめりと		
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしありはらの行平	ナシ	ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこありけりわりなきことを		ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかし物おもふおとこ		ナシ
							むかしおとこ伊勢さいくうに		
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしいろこのむ人ありけり		ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしすき物ともあつまりて	ナシ	ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこはるかなるほとに		ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしありけるいろこのみ女	ナシ	ナシ
	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	むかしおとこ女をきふし		ナシ
							むかしおとこともたちの	歌ノミアリ	

むかしそこにありとはきけど

注意

一、本表は、定家本（天福本・武田本・流布本）古本・眞名本・大島本（大島本・神宮文庫本）朱雀院塗籠本の各章段の有無並にその順位を對照したものである。

一、數字1・2・3等はそれぞれ底本の第一段・第二段・第三段等なることを示す。

一、諸本の各章段は、便宜底本各章段冒頭の語句を以て代表せしめたが、底本との間に章段の出入ある場合に限り特に原本から引用することとした。

一、一本にあつて他本になき章段は、各本その當該欄に「ナシ」と記した。

一、空白の欄は、その場所になきも他の箇所に該章段の存することを示すものである。

伊勢物語和歌索引

初句

あ

あかなくに	二一三㉗
あかねども	一九七⑲
秋かけて	二五五⑪
秋の野に	七八③
秋の夜の	六五⑧⑩
秋の夜は	二五〇⑨
秋や來る	四七⑳
朝露は	一二六④
あさみこそ	二七九⑧
蘆の屋の	二三六③
蘆邊漕ぐ	二四六③
蘆邊より	八九③
あだなりと	五一③
梓弓	七四⑧
	七五⑩
あひおもはで	七五⑭
あひみては	六四⑤
あふことは	八五②
あふなあふな	二四八④
近江なる	二〇一③
天雲の	五四④⑥
海人の刈る	一五八㉙
あやめ刈り	一三〇③
あらたまの	七四⑥
荒れにけり	一三六⑥

い

いかでかは	一三一③
いたづらに	一五九㊲
いつのまに	五六⑧
出ていなば	五八⑤
	九八⑪ 一〇一⑧
出てこし	一〇九⑥
出てゆく	一一四⑤
いとあはれ	九八⑬
いとどしく	二二④
いにしへの	八八②
	一四六⑥
いにしへは	二八七③
岩根ふみ	一八六②
岩間より	一八八⑥
いへばえに	九一②
いほりおほき	一一三⑨
今ぞしる	一三四③
今はとて	五九⑯
今までに	二三一⑤

う

うきながら	六四③
鶯の	三〇三②④
うちわびて	一三七⑫
うらわかみ	一三四②
植ゑし植ゑば	一三八②

お

老いぬれば	二三四⑥

おきなさび　二九一⑤
おきのゐて　二九四④
おきもせず　六⑦
おしなべて　二一三㉙
おほかたは　二四三③
大幣と　一三三⑤
大幣の　一三二③
大原や　一九〇⑤
大淀の　一八四③
一八八②
おもはずば　一三三②
おもひあまり　二八六③
おもひあらば　八③
おもふかひ　五九⑪
おもふこと　三〇六②
おもふには　一五六⑦
おもへども　二三七⑨
おもほえず　八〇③

か

かきくらす　一七三⑳
數々に　二七九⑭
春日野の　三⑦
風吹けば　六八⑰
二八四②
かたみこそ　三〇一③
かち人の　一七四㉘
唐衣　二五⑪
狩りくらし　二一一⑳
雁鳴きて　一七〇④

き

昨日今日　一六九⑥
君があたり　六九㉓
君がため　五六⑤
君こむと　六九㉖
君により　九六③
君やこし　一七三⑱

く

くらべこし　六七⑧
くり原の　四二⑨
暮れがたき　一一六⑩
紅に　五六④⑥

け

今日こずば　五一⑤

こ

戀しくば　一八三⑤
戀しとは　二八七⑦
戀せじと　一五七⑳
戀ひわびぬ　一〇五②
こもりえに　八九⑤
これやこの　四七⑱
一四六⑩

さ

咲く花の　二六七⑩
櫻花　二四四⑤
二六〇③
さ月待つ　一四二⑦
さむしろに　一五〇⑮
さりともと　一五八㉞

し

下紐の　二八七⑤
信濃なる　二三三④
しのぶ山　四四③
しほがまに　二〇五⑧
白玉か　一六⑫
白露は　二七六②
しるしらぬ　二六四⑥

す

須磨の海人の　二八九③
住みわびぬ　一四〇③
駿河なる　二五⑲

そ

袖濡れて　一八八④
そむくとて　二七一⑤
染河を　一四四③

た

谷せばみ　九三②
玉かづら　三〇〇③
玉の緒を　九二②

ち

千々の秋　二五〇⑪
ちはやぶる　一八三③
二七七③
散ればこそ　二一〇⑫

つ

月やあらぬ　一〇⑨
つゝゐづの　六七⑥
つひにゆく　三〇七②
罪もなき　八七④
つれづれの　二七九⑥

て

手を折りて　四七⑬

と

時しらぬ　二六㉒
年だにも　四七⑯
年をへて　三〇五③
とへばいふ　三九⑥
とりとめぬ　一五四⑤
鳥の子を　一三六②

な

ながからぬ　二九〇②
中空に　六〇㉒
なか〳〵に　四一④
などてかく　八三②
名にしおはば　二七㉞
一四四⑤
なにはづを　一六七④
名のみたつ　一二一⑦
涙にぞ　一六八⑧
浪間より　二九六③
ならはねば　九六⑤

ぬ

ぬきみだる　二三四⑰
濡れつつぞ　二〇五④

ね

ねぬる夜の　二七二⑤

の

野とならば　三〇五⑤

は

初草の　一二四④

花にあかぬ　八四❸
花よりも　二八五❷
晴るる夜の　二三五㉒

ひ

彦星に　二五二❻
人知れず　二四三❸
人知れぬ　一三❼
ひととせに　二一一㉓
人はいさ　五九⓭

ふ

吹く風に　一二六❻
・　一五四❸
ふたりして　九四❺

ほ

ほととぎす　二一一❺

ま

枕とて　二一九❻

み

みずもあらず　二六三❹
みちのくの　四❿
水口に　八一❻
みよしのの　三四❼
みるめ刈る　一八一❸
みるめなき　七九❺

む

葎おひて　一三六❾
武蔵鐙　一九❹
武蔵野は　一八❺
むつまじと　二九八❹
紫の　一〇七❾

め

めかるとも　一三〇❼
目にはみて　一八五❸

も

もゝとせに　一四九⓫

や

山城の　三〇四❷
山のみな　一九三⓫

ゆ

行きやらぬ　[illegible]❷
行く螢　一二六❽
行く水と　一三六❿
行く水に　一三六❽

よ

世の中に　二二〇❿
二三五❽
宵ごとに　二八四❹
夜も明けば　四一❼
世をうみの　二七四❹

わ

わが上に　一四〇❻
わが方に　三四❾
わが門に　二〇三❸
わが袖は　一三四❷
わがたのむ　[illegible]❹
わが世をば　[illegible]四⓯

忘るなよ　三六❸
忘るらんと　六〇⑳
忘草　六〇⓲
二六五❹
忘れては　二一九⓰
わたつ海の　二三五㉘
我ならで　九四❸
我ばかり　八一❹
我みても　二九七❷

を

惜めども　二四五❷

二句

あ

秋なき時や　一二八❷
淺間のたけに　二三❹
あすは雫とぞ　五一❺
あだにぞあるべき　一四四❺
あとだにいまだ　一〇九❻
あはれいく世の　一三六❻
あひみし事を　四七⓭
あふごかたみに　八三❷
海人とし人を　二七四❹
海人の刈りほす　一八八❹
海人の刈る藻に　一三五❷
あまの羽衣　四七⓲
ありもすらめど　一三三❷
ありもやしけむ　二八七❸
荒れたる宿の　一三六❾
あれはの松の　四二❾
沫緒によりて　九二❷

い

いざ事とはむ　二七㉞
いつか來にけむ　二〇五❽
いでにしたまの　二八六❸
いとど櫻は　二一〇⓬
命の程に　二九〇❷
いはでぞただに　三〇六❷
いはにぞかふる　一九七⓳
いはねばむねに　九一❷
いひしながらも　二五五⓫
いひし夜ごとに　六九㉖
今はあだなれ　三〇一❸
今はかぎりと　一四〇❸
色こき時は　一〇七❾

う

ううとだにきく　六〇⓲
宇津の山邊の　二五⓳
鶉となりて　三〇五❺
うつりてけふに　一九三⓫
うつろふ色の　五六❽

お

沖つ白浪　六八⓱
落穂ひろふと　一三七⓬
生ふる野邊とは　二六五❹
生ふるみるめし　一八八❻
おもひおもはず　二七九⓮
おもひならひぬ　九六❸
おもひはすべし　二四八❹
おもひやすらん　五九⓭
おもふ心の　六〇⑳
おもふ心を　八九❺
おもふらんこそ　一五八㉞
おもほえなくに　一三〇❼

か

かぎりなるべみ　九八⓫
かざしにさすと　二三五㉘

かさなる山に　一八六❷
数かくよりも　二三六❽
風にはありとも　一五四❺
方やいづこぞ　一八一❸
かはづのあまた　二八四❹
神の斎垣も　一八三❸
神よもきかず　二七七❸
かれぬる人を　七五⓮

き

消え残りても　一三六❹
菊の花咲く　一七〇❹
著つつなれにし　二五一⓫
きつにはめなで　四一❼
来てもみよかし　一八三❺
君がためにと　二一四❺　二六一❹
君は白波　二九八❹
君は沼にぞ　二三〇❸

く

草の庵に　一三四❷
草ひき結ぶ　二一九❻
雲には乗らぬ　二七一❺
雲の上まで　一一六❽
蜘蛛のたちまひ　一六九❻
苦しき物と　一三四❸

け

けさこそみつの　一六七❹
けなばけななむ　二七六❷
今日かあすかと　二三四⓯
今日こそかくも　二四四❺
今日はな焼きそ　三八❺

こ

心かるしと　五八❺
心の闇に　一七三⓴
心ひとつを　六四❺
こぞの櫻は　一三六❻
戀に死なずは　四一❹
戀はまさりぬ　二五二❻
衣かたしき　一五〇⓯

さ

笹わけし朝の　七八❸
さすがにかけて　三九❹
さらにもいはじ　二八七❼
さらぬわかれの　二三四❻　三三五❽

し

下にかくるる　一六七❿
下紐とくな　九四❸
しづのをだまき　八八❷
しでのたおさは　一一一❼　一二三❾
しのびてかよふ　四四❸
しのぶもぢずり　四❿
しのぶることぞ　一五六❼
しひてをりつる　二〇三❹
鹽やく煙　二八九❸
しるしとするも　二八七❺

す

過ぎゆくかたの　二三❹
過ぐるよはひと　一三六❿
住みこし里を　三〇五❸

そ

袖にみなとの　八〇❸
袖はひづらめ　二七九❽

た

絶えて櫻の　二一〇❿
たちゐるくもの　六〇㉒
棚なしを舟　二四六❸
たなばたつめに　二二一⓴
たのむのかりも　三四❼
玉の緒ばかり　八五❷
誰か別の　一〇一❽
た折れる枝は　五六❺

ち

千尋ある影　二〇三❸
千夜を一夜に　六五❽❿
散りかひくもれ　二六〇❸

つ

月をもめでじ　二四三❸
つくまのまつり　三〇一❸
露ぞ置くなる　一四〇❻
露やまがふと　四七⓴

て

手にはとられぬ　一八五❸

と

年の三とせを　七四❻
とはに浪こす　二八四❷
とはねばうらむ　二九❻
鳥のなくらむ　一三一❸
とをつつとをは　一三六❷
とをとてよつは　四七⓰

な

ながなく里の　二一一❺
ながめにまさる　二七九❻
なき世なりけり　五九⓫
なくぞ聞ゆる　九八⓭
なげきはいつも　八四❸
なだの鹽やき　二三三❸
夏のひぐらし　一一六❿
などめづらしき　二三四❹
なにかあやなく　二六四❻
名にこそたてれ　一三三❺　五二❸
なにぞと人の　一六⓬

に

にほひはいづら　一四六❻
にほふはいづら　五二❹
にほふがうへの　五三❻

ぬ

濡れつつしぼる　一八八❽

ね

ねもせでよるを　六❼
ねよげにみゆる　二三四❷

は

花橘の　一四二❼
花をぬふてふ　三〇二❷❹
はふ木あまたに　三〇〇❸
濱に生ふてふ　一八八❷
春のかぎりの　二四五❷
春日わするる　二五〇❾
春や昔の　一〇❾

ひ

ひく手あまたに　一三三❸

ひけどひかねど　七五❿
久しくなりぬ　二九七❷
人こそあだに　二八五❷
人こそあるらし　二三四⓱
ひとたび來ます　二一一㉓
ひとつの春に　二五〇⓫
ひととせ足らぬ　一四九⓫
人なとがめそ　二九一❺
人をうけへば　八七❹
人をばえしも　六四❸

ふ

ふりわけ髪も　六七❽

ほ

星か河邊の　二三五㉒
ほどは雲ゐに　二六❸

ま

まだきも月の　二一二㉗
松はつらくも　一八四❸
ま弓つき弓　七四❽

み

みたらし河に　一五七⓴
滿ち來る潮の　八九❸
道とはかねて　三〇七❷
みつつををらん　六九㉓
峯まではへる　九三❷
峯もたひらに　二一三㉙
みもせぬ人の　二六三❹
みゆる小島の　二九六❸
身をしわけねば　二二七❾
身を燒くよりも　二九四❹

む

葎の宿に　八❸
結びし紐を　九四❺

も

藻にすむ蟲の　一五八㉙
ものおもふ人は　八一❹

や

山は富士の嶺　二六㉒

ゆ

行きてはきぬる　一五九㊲
夢かとぞ思ふ　二一九⓰
夢路をたのむ　一三六❷
夢をはかなみ　二七二❺

よ

よそにのみして　五四❻
よそにも人の　五四❹
世の人ごとに　九六❺
よるとなくなる　三四❾

わ

わがかよひ路の　一三❼
我戀しなば　二四三❸
わが身をうらと　七九❺
わが身をなさば　一五四❸
若紫の　三❼
忘るる草の　五九⓰
忘れぬ人は　二三一❺
渡らむ人の　一四四❸
渡れど濡れぬ　一七四㉑
我にあふみを　一四六❿
我やみゆらん　八一❻
我や行きけむ　一七三⓲

ゐ

井手の玉水　三〇四❷
ゐづづにかけし　六七❻

を

をしほの山も　一九〇❺

三　句

あ

あかしては　六❼
秋はあれど　一七〇❹
朝顏の　九四❸
朝なぎに　二〇九❽
あぢきなく　二四三❸
跡もなく　六〇㉒
あふ事は　一九三⓫
あまたあれば　二一一❺
天の河　一四〇❻
二五三❻
あらなくに　一八四❸
二五五⓫
あらねども　一三四❷
一八六❷
ありといへば　二三四❻
ありぬべし　一三六❹
あるならん　二八六❸

い

いかでかは　八九❺
一四四❸
いくそたび　二四六❸
生駒山　六九㉓
いつとてか　二六㉒
いでていなば　三〇五❸
いとまなみ　二三三❸
いぬべくは　一一六❽
いはなれや　二八四❷
いはふ藻も　二三五㉘
いひやせむ　五八❺
今ぞしる　二八七❸
いやましに　八九❸
色みえぬ　一九七⓳

う

うたがひに　六〇⓴
うつつにも　二五⓳
浦ごとに　一六七❹
うれたきは　一三六❾
うゑつれば　二〇二❸

え

えにしあれば　一七四㉘

お

おいらくの　二六〇❸
おもひきや　二一九⓰
おもふまで　四七⓴
おもほえず　一七三⓲
おもほえで　八九❷

か

かくるるか　二一二㉗
かくろふは　一六九❻
かさぬとも　一三六❷
笠はいな　三〇二❹
笠もがな　三〇三❷

風をいたみ　二八九❸
かぞふれば　四七⑬
かたからん　一〇一❽
かたすぎぬ　六七❽
かなしきは　二九四❹
かなしけれ　一五八㉞
かはしまの　六四❺
かはづさへ　八一❻
かはらじを　一〇九❻
狩衣　二九一❺
香をかげば　一四〇❼

き
消えずとて　二七六❷
聞かませば　一三七⑫
聞きしかど　三〇七❷
君侍てば　二一一㉓

く
くだかけの　四一❼
くはこにぞ　四一❹
くりかへし　八八❷

け
けさぞなく　一二一❼
今日こそは　一九〇❺
今日の日の　二四五❷

こ
越えぬべし　一八三❸
言の葉ぞ　一三四❹
言の葉の　一三三❷
こともせじ　二一九❻
戀しきに　三一❹
戀しくば　二六三❹
今宵もや　一五〇⑮
これぞこの　二四二❸
これなくば　三〇一❸

さ
吹かざらん　二三八❷
櫻花　五一❸
一四六❻
さわがれて　九一❷
さわぐかな　八〇❸
棹さして　一八一❸

し
下紐の　二八七❼
白菊は　五二❻
白玉の　二三四⑰
しられねば　七九❺
白雪の　五二❹

す
過ぎぬれば　六九㉖
住吉の　二九七❷
摺衣　三❼

せ
關守は　一三❼
せしかども　八四❸
せしみそぎ　一五七⑳

そ
袖よりも　七八❸

た
立つ烟　二三❹
たつた河　二七七❸
たつた山　六八⑰
たねをだに　五九⑯
たのむには　三九❹
たはれ島　一四四❺
玉かづら　五九⑬
九二❷
玉すだれ　一五四❸❺
袂には　一三二❷
たれゆゑに　四❿

ち
ちはやぶる　一八三⑮
散らずとも　二二六❻
散る花と　一二六❿

つ
つきぬらん　五六❽
月のうちの　一八五❸
つくもがみ　一四九⑪
つましあれば　二五⑪
つれなくば　一八八❻

て
手にむすび　三〇四❷

と
とくせなん　三〇一❸
とけなくに　二八七❺
年月を　五九⑪
年の内に　二〇三❹
年をへて　七四❽
とどめかね　七五⑭
とひがたみ　二七九⑭
とひし時　一六⑫
ともしけち　九八⑪⑬

な
ながむれば　一一六❿
なかりせば　二一〇❿
流れても　一二二❺
なきをらん　三〇五❺
泣くだには　二八四❹
なくもがな　二二五❽
なずらへて　六五❽
なせりとも　六五❿
なぞへなく　二四八❹
なにをかも　九六❺
猶たのむ　一二三❾
涙河　二七九❻❽
なりななむ　二二三㉙
なりにけむ　八三❷
なりにけれ　二八五❷
なりぬとも　三六❸
なりぬれば　一二三❸
三〇〇❸
なりゆくか　五四❹

に
にほふとも　二四四❺

ぬ
ぬぎつれば　二一四❺

ね
ねもしなん　八❸

の
のがれつつ　一四六❿

は
はかなきは　一二六❽
はまびさし　二九六❸
春ながら　五六❺
春ならぬ　一〇❾
ひ
ひたぶるに　三四❼
人おほみ　二六七❿
人しれず　一三一❸
人ならば　四二❾
人またむ　一二四❸
ひとりして　九四❺
ふ
ふりなまし　五一❺
ふることは　五四❻
へ
へにけるを　四七⓰
ほ
螢かも　二三五㉒
ま
まけにける　一五六❼
又もあらじと　八一❹
待ちわびて　七四❻
待つかひの　二三四⓯
まどひける　一三〇❸
まどひにき　一七五⓴
まどみめば　二七二❺
まろがたけ　六七❻
み
道もがな　四四❸
みづかきの　二九八❹
都鳥　二七㉞
みよしのの　三四❾
みるからに　一八八❷
二七四❹
みるらめど　二六五❹
む
昔より　七五❿
むかはめや　二五〇⓫
武藏鐙　三九❻
むすべれば　九二❷
むべしこそ　四七⓲
め
めかれせぬ　三三七❾
めでたけれ　三二〇⓬
めもはるに　一〇七❾
も
ものならば　六〇⓲
ものなれど　二七一❺
ものなれや　二五〇❾
ものゆゑに　一五九㊲
や
宿からむ　三一一⓴
宿なれや　一五六❻
宿るてふ　一七九❷
山里に　一四〇❸

やみぬべき　二〇六❷
よ
世にもあらじ　二三一❺
世の中の　九六❸
世の人の　一八八❽
わ
若草の　三八❺
若草を　一二四❷
わきていはむ　二六四❻
わすらるる　一三〇❼
わするるは　二九〇❷
忘草　八七❹
わすれねば　六四❸
わだつうみの　一八八❹
我からと　一五八㉙
を
折る花は　二六一❹

四句

あ
秋風吹くと　一一六❽
秋の夜とだに　二一九❻
あだに契りて　五九⓫
あなたのみがた　一二六❻
二四四❺
あはでぬる夜ぞ　七八❸
あはぬ日おほく　一八六❷
あひみるまでは　九四❺
あふにしかへば　一五六❼
天つ空なる　一三三❷
天の河原に　二一一⓴
あやなくけふや　二六五❹
ありしにまさる　一〇一❽
二六七❿
ありしよりけに　六〇⓴
あるにもあらぬ　一五八㉞
あるは涙の　四七⓴
い
いかに短き　二九〇❷
いくたび君を　四七⓰
いづれの神に　二四三❸
いづれまでてふ　一二六❿
いづれをききに　二八五❷
いとど深草　三〇五❸
庵あまたと　一一一❼
いやはかなにも　二七二❺
いよ／＼みまく　二二四❻
色になるてふ　一四四❸
う
うき世になにか　三二〇⓬
うらなく物を　一三四❹
うらみてのみも　一八四❸
うらやましくも　二三❹
え
枝もとををに　五二❹
お
大宮人の　一八三❸
おもかげにのみ　五九⓭
おもはぬ方に　二八九❸
おもはぬ人を　一三六❷❽
おもひけりとは　六〇⓲
おもひのみこそ　二六四❻

おもひを告げよ　三〇二④
おもふ心は　一三一③
おもへどえこそ　一三三③
おもへば水の　八一④

か

かかる折にや　三九⑥
かくこそ秋の　五六⑤
霞に霧や　二五〇⑨
かたるかごとは　二八七⑤
かつ怨みつつ　六四③
桂のごとき　一八五③
かのこまだらに　二六㉒
神のいさむる　一八三⑤
神はうけずも　一五七⑳
神よのことも　一九〇⑤
からくれなゐに　二七七③
狩にだにやは　三〇五⑤
かりにも鬼の　一五六⑨
かれなで海人の　七九⑤

き

消えずはありとも　五一⑤
岸のひめ松　二九七②
きのふけふとは　三〇七②
君がかたにぞ　三四⑦
君が里には　五六⑧
君がためには　二三五㉘
君がみけしと　四七⑱
君ならずして　六七⑧
君に心を　八九③
消ゆる物とも　九八⑬

く

雲なかくしそ　六九㉓
暮るれば露の　一三四②

け

今日ばかりとぞ　二九一⑤
今日の今宵に　八四③

こ

こけるからとも　一四六⑥
心は君に　七五⑩
心は泣きぬ　一八八②
心ひとつに　九一②
心をみせむ　一九七⑲
言葉殘りて　六五⑩
木の葉降り敷く　二五五⑪
こはしのぶなり　二六五④
戀しき人に　一五〇⑮
戀とはいふと　九六⑤
こむといふなる　二六〇③
これやこの世を　一二七④

さ

さすがに目には　五四④
里をばかれず　一二四③

し

しのぶのみだれ　三五⑦
しほひしほみち　一八八⑥

す

過ぎにけらしな　六七⑥
すみけむ人の　一三六⑥

そ

袖のみひぢて　二七九⑥
そのこととなく　一一六⑩

空行く月の　二八③

た

絶えてののちも　九二②
絶えぬ心の　三〇〇③
絶えむと人に　九三②
たがかよひぢと　一〇九⑥
たかきいやしき　二四八④
たがゆるさばか　一五四⑤
ただ今宵こそ　七四⑥
たのまぬ物の　六九㉖
たのみしかひも　二〇四②
たのむの雁を　二四⑨
玉にぬくべき　二七六②
たれかこの世を　一六六④

ち

千代もと祈る　二三五⑧

つ

つげの小櫛も　二三三③
つひによる瀬は　一三三⑤
つまもこもれり　三八⑤
つもれば人の　二四二③
露とこたへて　一六⑫
つらき心は　一八八⑧
つらき心の　八五②
つりする舟は　二〇五⑧
つれなき人の　三〇一③

と

時しなければ　一二〇⑦
時しもわかぬ　二六一④
とけむを人は　二八七⑦
年月ふれど　一四六⑩
年にまれなる　五一③
年へぬるかと　九八⑪
とはぬもつらし　三九④
とわたる舟の　一四〇⑥
とをといひつつ　四七⑬

な

夏冬たれか　二〇三③
猶うとまれぬ　一二一⑤
涙の瀧と　二三四⑮
浪のぬれぎぬ　一四四⑤
なるべかりける　四一④

ぬ

ぬるめる人に　三〇二②

ね

音をこそなかめ　一五八㉙

の

野なる草木ぞ　一〇七⑨

は

花こそ散らめ　一三八②
花のはやしを　一六九⑥
春の海邊に　一七〇④
春の心は　二一〇⑩
春のものとて　六⑦
春のわかれを　一九三⑪
春はいくかも　二〇三④
はるばるきぬる　二五⑪

ひ

ひじきものには　八③
久しき世より　二九八④
久しくなりぬ　二九六③

人の心に　五九⑯
人の心の　四四③
人のむすばむ　一三四②
人はこれをや　九六③
ひまもとめつつ　一五四③

ふ

舟さす棹の　八九⑤

へ

隔つる關を　二五二⑥

ま

又逢坂の　一七四㉛
まだきに鳴きて　四一⑦
まだみぬ人を　二八七③
またくも散るか　二三四⑰

み

身さへ流ると　二七九⑧
みだれそめにし　四⑩
水こそまされ　二八四④
水のしたにて　八一⑥
水のながれて　六四⑤
水もらさじと　八三②
身のはかなくも　六〇㉒
みまくほしさに　一五九㊲
みやこ島邊の　二九四④
都のつとに　四三⑨
みるをあふにて　一八八④
身をかくすべき　一四〇③
身をしる雨は　二七九⑭

む

昔の人の　一四二⑦
昔を今に　八八②

め

めくはせよとも　二七四④

も

もみぢも花も　二五〇⑪
もろこし舟の　八〇③

や

八千夜しねばや　六九⑧
宿かす人も　二一一㉓
山の端なくば　二一三㉙
山の端にげて　二一二㉗

ゆ

行きかへるらむ　二四六③
雪のつもるぞ　二三七⑨
雪ふみわけて　二一九⑯
夕かげまたぬ　九四③
夕ぐれにさへ　二四五②
ゆめうつつとは　一七三⑳
夢かうつつか　一七三⑱
夢にも人に　二五⑲

よ

世のありさまを　五八⑤
世のうきことぞ　二七一⑤
夜半にや君が　六八⑰
宵々ごとに　一三⑦
夜ぶかくみえば　二八六③

わ

わがおもふ人は　二七⑭

わが衣手の　二八四②
わがすむかたの　二三五㉒
わがすむ里に　一二二⑨
わがせしがごと　七四⑧
わが身は今ぞ　七五⑭
わが身ひとつは　一〇⑨
わがゐる山の　五四⑥
忘るる時も　三〇一③
我から身をも　一三五②
我さへもなく　一二四⑤
我とひとしき　三〇六②
我に教へよ　一八一③
我は野にいでて　一三〇③
我も田づらに　一三七⑫
我を無ふらし　一四九⑪

を

をちこち人の　二三④
をのがうへにぞ　八七④
をのがさまざま　二二一⑤
折りける人の　五二⑥
折ふしごとに　一三三②

五句

あ

あく時のあらん　六五⑧
足たゆく来る　七九⑤
あすの夜のこと　二四四⑤
あはでのみ寝む　一五〇⑮
あはむとぞ思ふ　九二②
あはぬなりけり　二五⑲
あふよしもなし　二七九⑥
海人のたく火か　二三五㉒
海人の釣舟　一八一③
雨は降らねど　二八四④
雨は降るとも　六九㉓
あらじとおもへば　二〇三④
あらじとぞおもふ　二一一㉓
あらましものを　三〇一③
ありといふものを　一三三⑤
ありやなしやと　二七㉞

い

いくよへぬらん　二九七②
いざといはましを　四二⑨
いざなはれつつ　一五九㊲
いつか忘れむ　三四⑨
いづれたかけむ　二三四⑮
いとどみえつつ　五九⑬
いはひそめてき　二九八④
今はなるらむ　一〇九⑥
今はやめてよ　二五二⑥
いもみざるまに　六七⑥
入るべきものを　一五四③
入れずもあらなむ　二一二㉗

う

うしとなりけり　一六九⑥
うちも寝ななん　一三⑦
うとまれぬれば　二一一⑦
うみわたる舟　一六七④
うるはしみせよ　七四⑧
うれしげもなし　三〇〇③

え

えにこそありけれ　二五五⑪

お

老いとなる物　二四二③
奥もみるべく　四四③
おとづれもせぬ　一三六⑥
生ふといふなる　八七④

おもかげにたつ　一三〇⑦
おもかげにみゆ　一四九⑪
おもはざりしを　三〇七②
おもひいづらめ　一九〇⑤
おもひけるかな　一二四④
おもひますかな　八九③
おもふなりけり　一三六⑧
おもふものかは　一三六②
おもふものから　一二一⑤

か

櫂のしづくか　一四〇⑥
かぎりしられず　三五⑦
かくれざるべき　二〇二③
風はやみなり　五四⑥
かたらはねども　一八八②
かひもありなむ　一八八⑥
かへる浪かな　一二二④　一八四③
雁につげこせ　一一六⑧
刈るぞわびしき　一三〇③
かわく時なき　二八四②

き

消えなましものを　一六⑫
消えはてぬめる　七五⑭
聞かばたのまむ　二七九⑧
著せてかへさむ　三〇二②
君にぞありける　一八五③
君はこざらむ　三〇五⑤
君にあひみて　二九六③
君をみむとは　二一九⑯
著るといふなり　一四四⑤

く

砕きつるかな　一三五②
苦しかりけり　二四八④

け

今日はかなしも　一〇一⑧

こ

ここによらなむ　二〇五⑧
心なるらむ　二九〇②
ことのなからむ　一四四③
ことを聞くらむ　一三六⑩
ことをしぞおもふ　一二四②
戀ひずぞあるべき　二八七⑤
戀ひつつぞふる　六九㉖
戀といふらむ　九六③
戀ひむとかみし　二八五②
戀ひわたるかな　一八六②
戀ふるものとは　二八七③
今宵さだめよ　一七三⑳
聲し絶えずば　一一三⑨

さ

ささずきにけり　二三三③
さしてしるべき　八九⑤
さもあらばあれ　一五六⑦

し

下にもありけり　八一④
知りもしなまし　六〇⑱
しる人もなみ　二四六③
しるべなりけれ　二六四⑥

す

すだくなりけり　一三六⑨
住吉の濱　一七〇④

せ

關は越えなん　一七四㉛
せなをやりつる　四一⑦

そ

袖かともみゆ　五二⑥
袖の香ぞする　一四二⑦
袖のしづくか　一八八⑧
袖のせばきに　二二四⑰
袖をしつつも　八③
それとしらなん　二八七⑦

た

絶えじとぞおもふ　六四⑤
たづもなくなる　二九一⑤
たてまつりけれ　四七⑱
たなびきにけり　二八九③
たのまざりけれ　一三三③
たのまるるかな　一三五②　二七四④
たのまれなくに　二一九⑥
たのみきぬらん　四七⑯
たのみはつべき　一三六④
たびをしぞおもふ　二九五⑪
玉の緒ばかり　四一④
たまむすびせよ　二八六③
たれかあぐべき　六七⑧

ち

ちへまさるらん　二五〇⑨

つ

月も入らじを　二一三㉙
露や置くらん　一三三②

と

解かじとぞおもふ　九四⑤
年のへぬれば　二三一⑤
とひし我しも　九六⑤
とふとなるべし　一九三⑪
とふべかりけり　一二四③
とふもうるさし　三九④
ともにこそ散れ　二五〇⑪
とりや鳴きなん　六五⑩

な

ながくみゆらむ　八五②
ながめくらさむ　二六三④
ながめくらしつ　六〇⑦
なき名おほせむ　二四三③
なきよなりけり　三〇四②
なく聲をきけ　九八⑪
なげくころかな　九一②
なすよしもがな　八八②
なべのかずみむ　三〇一③
猶ぞこひしき　六四③
なりにけるかな　六〇⑭　一四六⑥　一五七⑳　二四五②
なりぬべきかな　一二四⑤
なりまさるかな　二七三⑤

に

似る時はなし　八四③
にひ枕すれ　七四⑥

ね

根さへ枯れめや　一三八②
ねてかさめてか　一七三⑱

の
後もたのまむ　二六五④
のどけからまし　二一〇⑩
野とやなりなむ　三〇五③

は
花とみましや　五一⑤
花にはありとも　九四③
春なかるらし　五六⑧

ひ
久しかるべき　二二〇⑫
ひぢまさりける　七八③
人しなければ　二〇六②
人の心は　一六六⑥
人の子のため　二六五⑧
人はしぬらむ　三九⑥
人はしらねば　五八⑤
人もあらじを　二七六②
人も待ちけり　五一③
ひとり越ゆらむ　六八⑰
ひまもとむべき　一五四⑤

ふ
藤のかげかも　二六七⑩
ふりぞまされる　二七九⑭
ふるかともみゆ　五二④
ふるにぞありける　四七⑳

ほ
ほしき君かな　二二四⑥
ほしてかへさむ　二〇二④

ま
まかせずもがも　五九⑯
まさりがほなき　一四六⑩
まだよふかきに　一三一③

み
道ならなくに　一八三⑤
道まがふがに　二六〇③
水くくるとは　二七七③
みまくほしさに　一八三③
みやはとがめぬ　二三④
みゆるものから　五四④
身をしらずして　一五八㉞

む
むすびしものを　八〇②

め
めぐりあふまで　三六③

も
もとの身にして　一〇⑨
ものぞかなしき　六〇⑳
一六六⑩
ものにぞありける　二六一④
もみぢしにけれ　五六⑤
もろごゑになく　八一⑥

や
宿もとめてむ　一四〇③
やどりなりけり　一三四②
やまむとやする　一六八④

ゆ
ゆかましものを　一三七⑫
雪の降るらむ　二六㉒

よ
よしのなければ　一九七⑲
よそになるてふ　二七一⑤
四つは經にけり　四七⑬
よりしばかりに　八〇③
よりにしものを　七五⑩
よるとなくなる　二四⑦
世をばうらみじ　一五八㉙

わ
わがおもはなくに　九三②
わが心なる　二七⑨
わかれざりける　一〇七⑨
わかれなりけり　二九四④
我ならなくに　四⑩
我はきにけり　二一一⑳
我はしらずな　九八⑬
我もこもれり　三八⑤
我やすまひし　五九⑪

を
惜しまざりけり　二三五㉘

伊勢物語古寫本聚影

伊勢物語古寫本聚影目次

定家本系統の諸本

天福本

第一圖　傳定家筆本伊勢物語（其一）　三條西伯爵家藏
第二圖　同　（其二）　同
第三圖　同　（其三）　同
第四圖　冷泉爲和筆本伊勢物語　宮內省圖書寮藏
第五圖　法橋玄津筆本伊勢物語（其一）　架藏
第六圖　同　（其二）　同

第七圖	法橋玄津筆本伊勢物語（其三）	架藏
第八圖	逍遙院筆本伊勢物語	三條西伯爵家藏
第九圖	三條西實隆筆本伊勢物語（其一）	同
第一〇圖	同　（其二）	同
第一一圖	傳牡丹花筆本伊勢物語	架藏
第一二圖	東大研究室本伊勢物語（其一）	東大研究室藏
第一三圖	同　（其二）	同
第一四圖	傳二條爲重筆本伊勢物語	三條西伯爵家藏

武田本

第一五圖	傳尊應准后筆本伊勢物語（其一）	三條西伯爵家藏
第一六圖	同　（其二）	同
第一七圖	高野本伊勢物語（其一）	高野辰之博士藏
第一八圖	同　（其二）	同

流布本

第一九圖	千葉本伊勢物語（其一）	千葉胤明氏藏
第二〇圖	同　（其二）	同
第二一圖	同　（其三）	同
第二二圖	同　（其四）	同
第二三圖	七海本伊勢物語	七海兵吉氏藏
第二四圖	山崎宗鑑筆本伊勢物語	架藏
第二五圖	一條兼良本伊勢物語（其一）	同
第二六圖	同　（其二）	同

第二七圖　傳四條隆重筆本伊勢物語　七海兵吉氏藏
第二八圖　奈良京物語　同
第二九圖　豐原統秋筆本伊勢物語（其一）　架藏
第三〇圖　同（其二）　同
第三一圖　片假名書入本伊勢物語　同
第三二圖　傳飛鳥井雅俊筆本伊勢物語　同

古本系統の諸本

第三三圖　傳爲相筆本伊勢物語（其一）　七海兵吉氏藏
第三四圖　同（其二）　同
第三五圖　傳慈鎭・爲家兩筆本伊勢物語（其一）　須田竹次郎氏藏
第三六圖　同（其二）　同
第三七圖　同（其三）　同
第三八圖　傳良經筆本伊勢物語　守屋孝藏氏藏
第三九圖　承久本伊勢物語（其一）　七海兵吉氏藏
第四〇圖　同（其二）　同
第四一圖　同（其三）　同
第四二圖　飛鳥井榮雅書入本伊勢物語（其一）　架藏
第四三圖　同（其二）　同
第四四圖　傳慈鎭筆本伊勢物語　靜嘉堂文庫藏
第四五圖　最福寺本伊勢物語　最福寺藏
第四六圖　時頼本伊勢物語（其一）　最明寺藏
第四七圖　同（其二）　同

大島本系統の諸本

第四八圖　大島本伊勢物語（其一）　大島雅太郎氏藏
第四九圖　同　（其二）　同
第五〇圖　同　（其三）　同
第五一圖　神宮文庫本伊勢物語（其一）　神宮文庫藏
第五二圖　同　（其二）　同

朱雀院塗籠本系統の諸本

第五三圖　不忍文庫本伊勢物語（其一）　大島雅太郎氏藏

第五四圖　同　（其二）　同
第五五圖　丹表紙本伊勢物語　架藏

眞名本系統の諸本

第五六圖　桂宮本眞名伊勢物語　宮內省圖書寮藏
第五七圖　九條本眞名伊勢物語　架藏
第五八圖　天明本眞名伊勢物語　同

附

第五九圖　貞和本伊勢物語（其一）　彰考館文庫藏

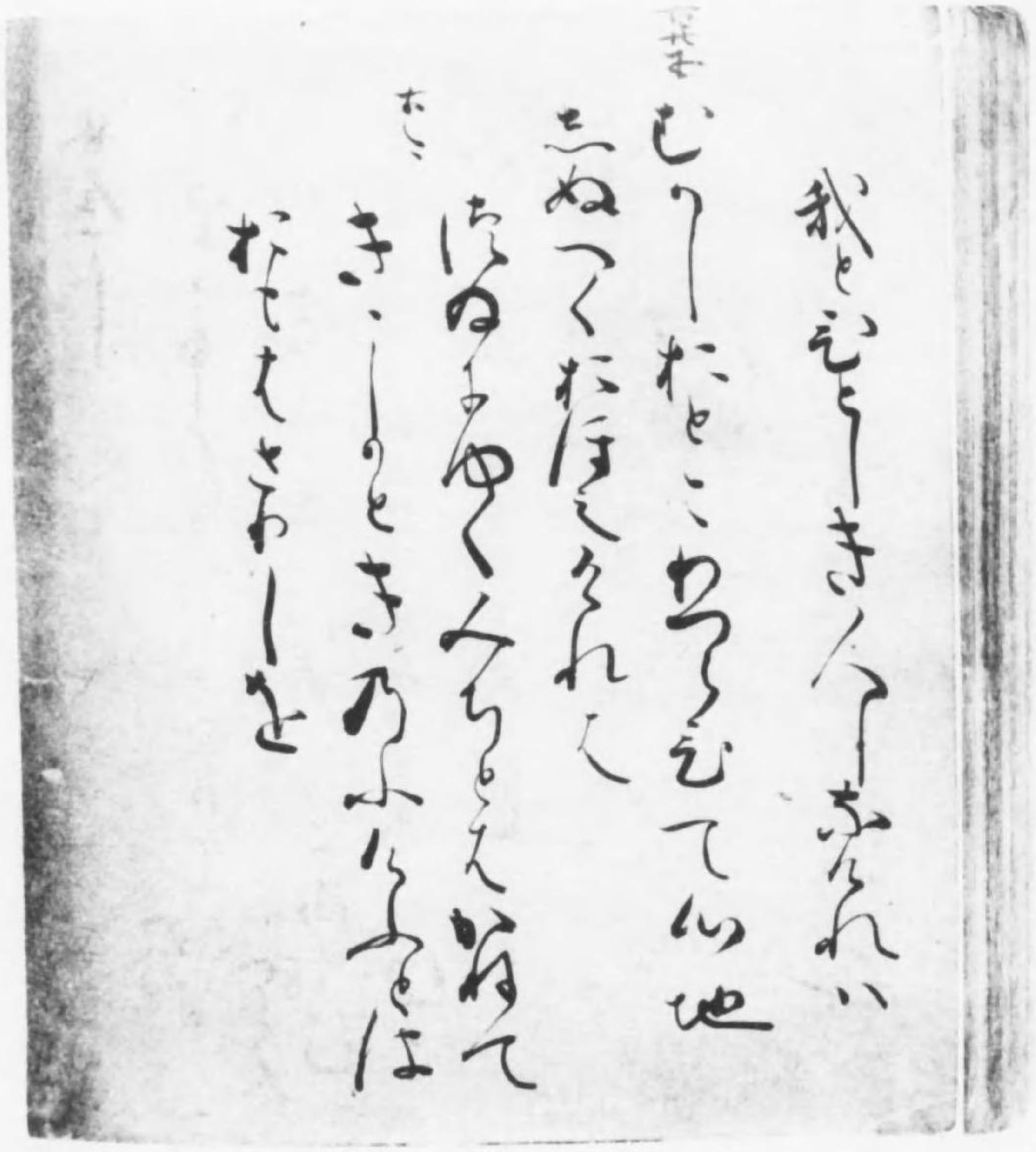
第六〇圖　同　（其二）　同

第一圖

傳定家筆本伊勢物語（其一）

三條西伯爵家藏

此の伊勢物語は永く三條西家の祕庫に收められてゐた證本である。縱五寸二分五厘、橫四寸九分、薄樣鳥の子の料紙を綴つて胡蝶裝とし、每紙兩面に書寫してある。卷頭の貼紙は本書を以て京極黃門眞跡となすが、鎌倉期に遡る書寫とは認め難く、筆跡も定家のそれに稍遠い憾がある。然したとひ定家自筆本にあらずとするも、天福本として殆ど完璧に近いものである。今ここに本文一葉と、奧書一葉と、それに逍遙院實隆が明應七年六月校合附加した武田本奧書一葉とを揭載することとした。

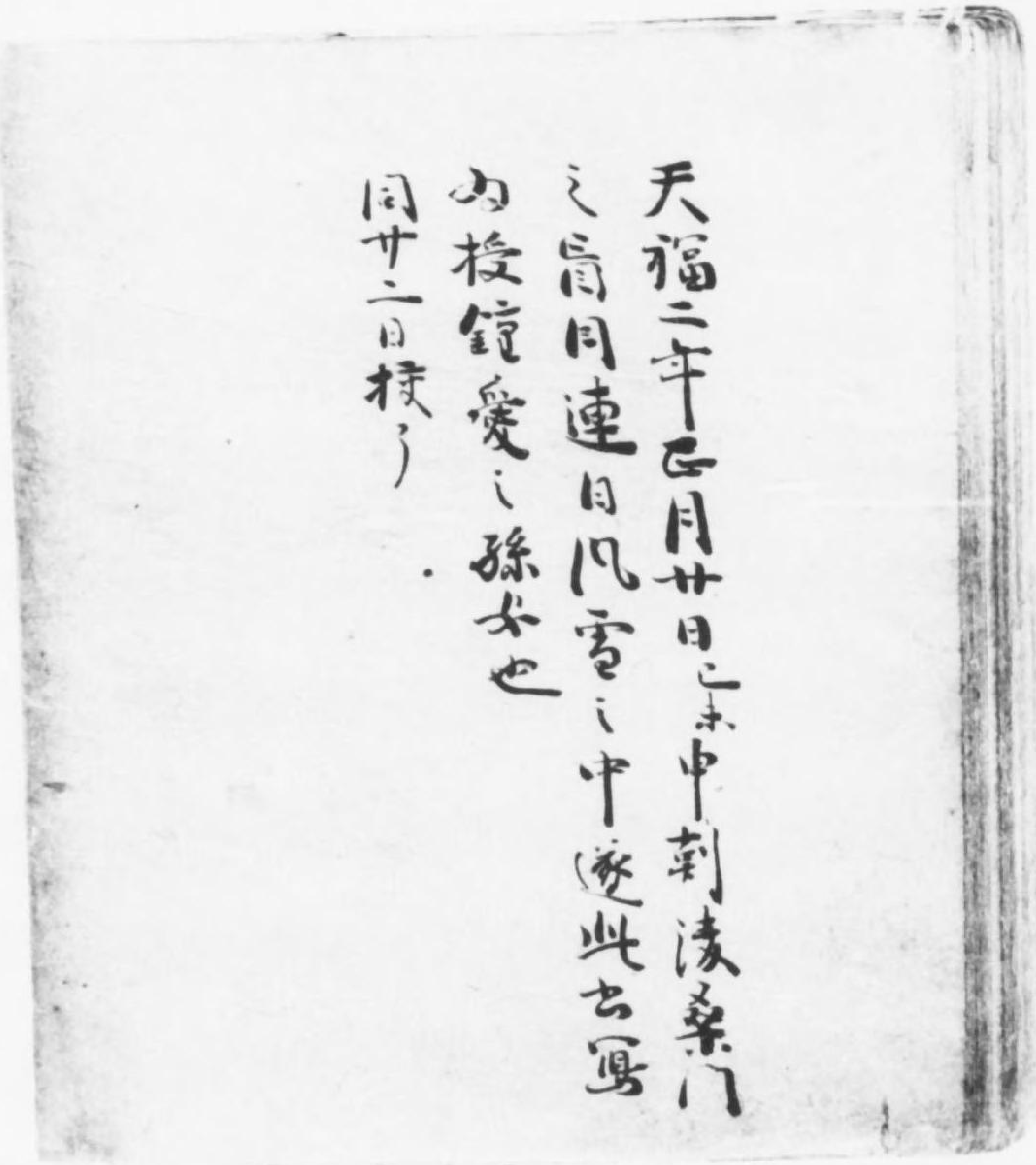


我とひとしき人しなけれは
百廿五
むかしをとこわつらひて心地
しぬへくおほえけれは
つゐにゆくみちとはかねて
きゝしかときのふけふとは
おもはさりしを

第二圖

傳定家筆本伊勢物語（其二）

三條西伯爵家藏



天福二年正月廿日己未申刻凌桑門
之盲目連日風雪之中遂此書寫
為授鍾愛之孫女也
同廿二日校了

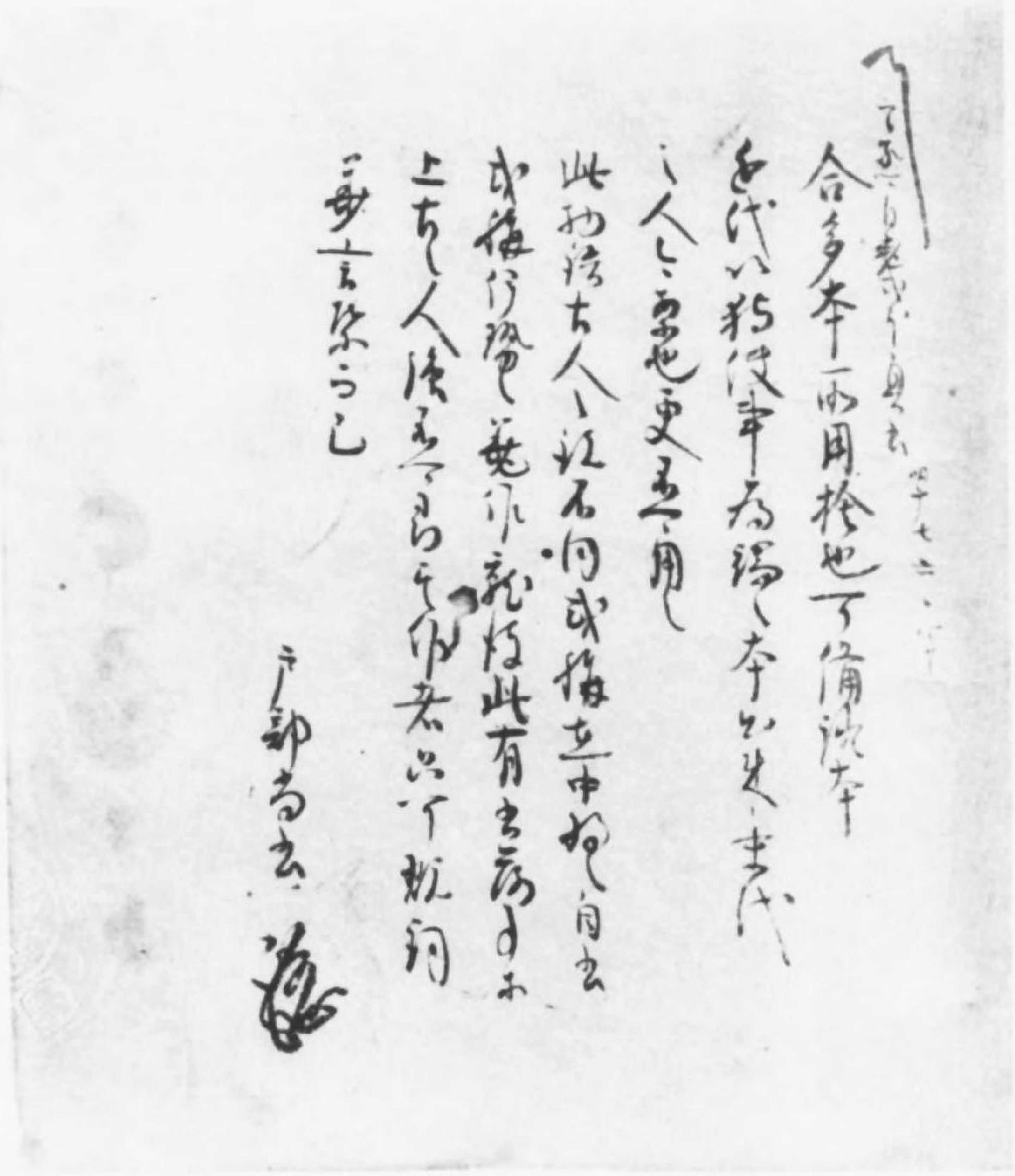
第三圖

傳定家筆本伊勢物語（其三）

三條西伯爵家藏

傳定家筆本伊勢物語（其三）　三條西伯爵家藏

第三圖



[illegible]

合多本所用捨也可備證本

近代以狩使事爲端之本出來末代

之人之新作也更不可用之

此物語古人之説不同或稱在中將之自書

或稱伊勢之筆作就彼此有書落事等

上古之人猶不可知之仰老只可翫詞

無左右取捨之已

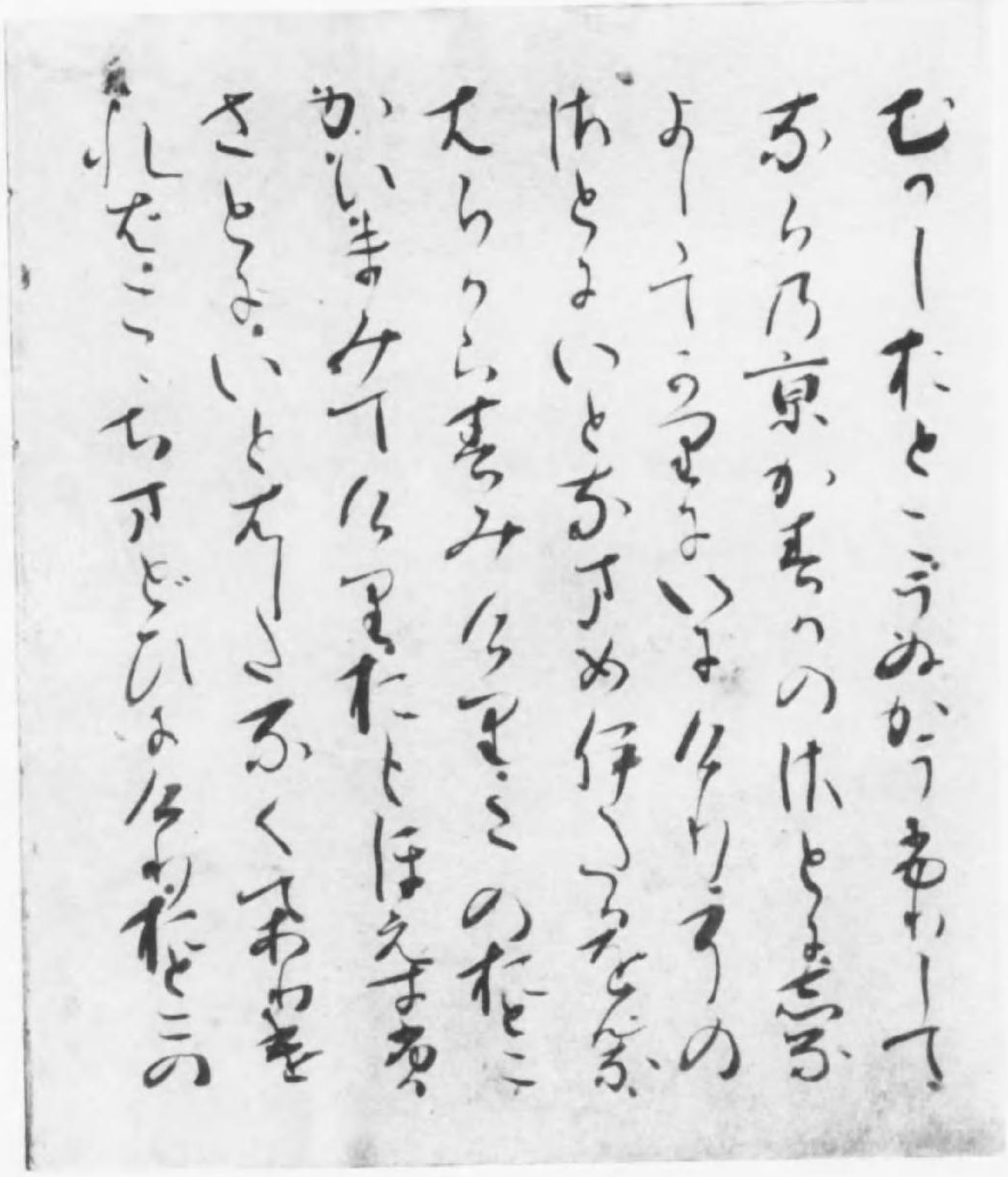
戸部尚書

第四圖

冷泉爲和筆本伊勢物語

宮内省圖書寮藏

本書は宮内省圖書寮所藏伊勢物語諸本中の白眉とも稱すべき本である。　縱横共に五寸九分、桝形、鳥の子、胡蝶裝。　筆者の爲和なることは、附屬の書翰、家傳の書風、書寫年代等から推して疑ふ餘地はない。　識語によれば、本書は奥書・勘物はもとより、行數・字詰・見せけち・補入・漢字假名の別・字體等の末に至るまで、定家自筆天福本を極めて嚴密に摸寫したことになつて居り、事實またそれに近いものがある。　傳定家筆本に次ぐ優秀なる天福本として擧げることが出來る。　今卷頭一葉を圖版にをさめた。



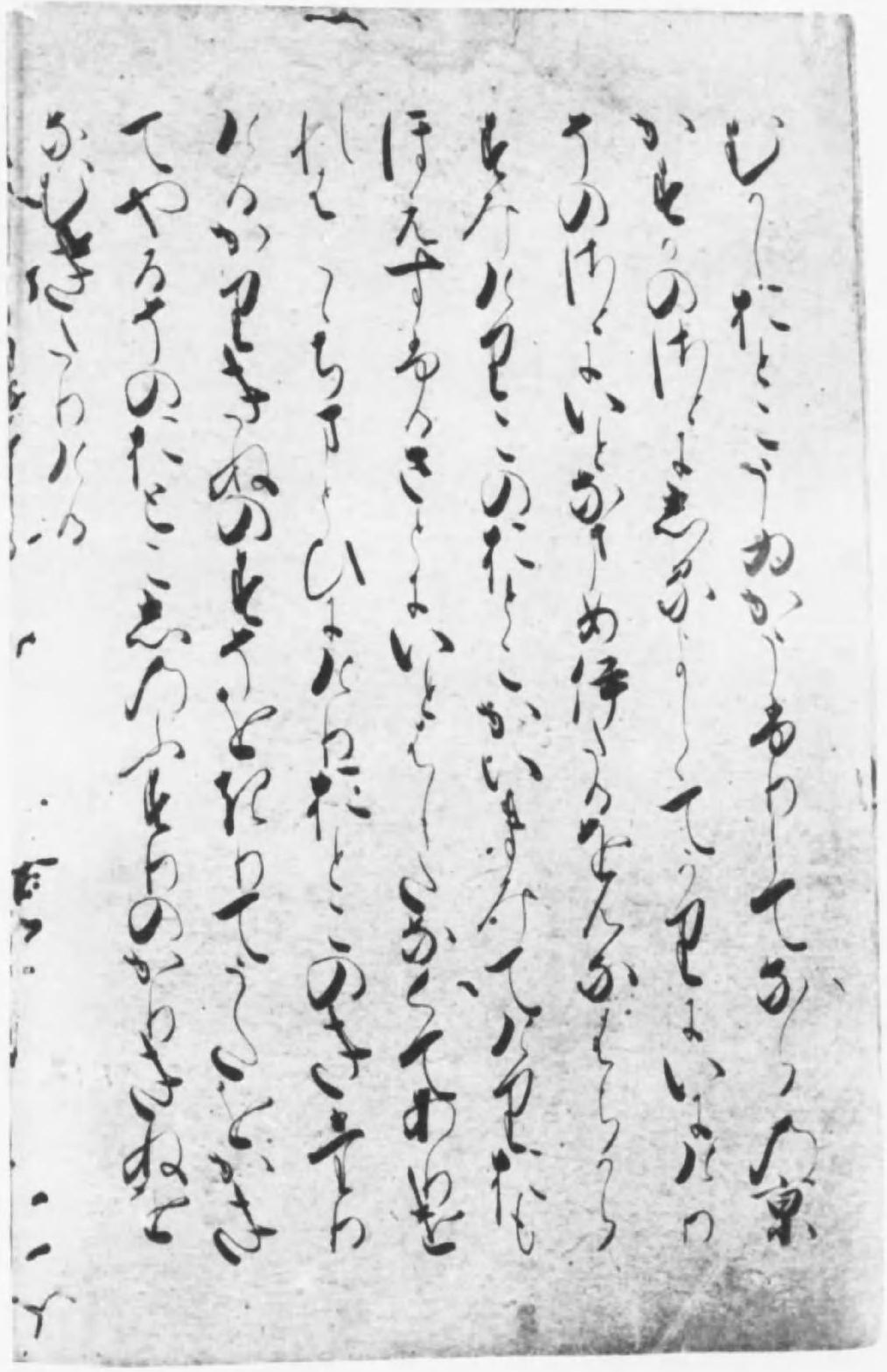
むかしをとこうゐかうふりして
ならの京かすかのさとにしる
よしゝてかりにいにけりその
さとにいとなまめいたる女はら
からすみけりこのをとこ
かいまみてけりおもほえすふる
さとにいとはしたなくてありけれは
心ちまとひにけりをとこの

第五圖

法橋玄津筆本伊勢物語（其一）

架藏

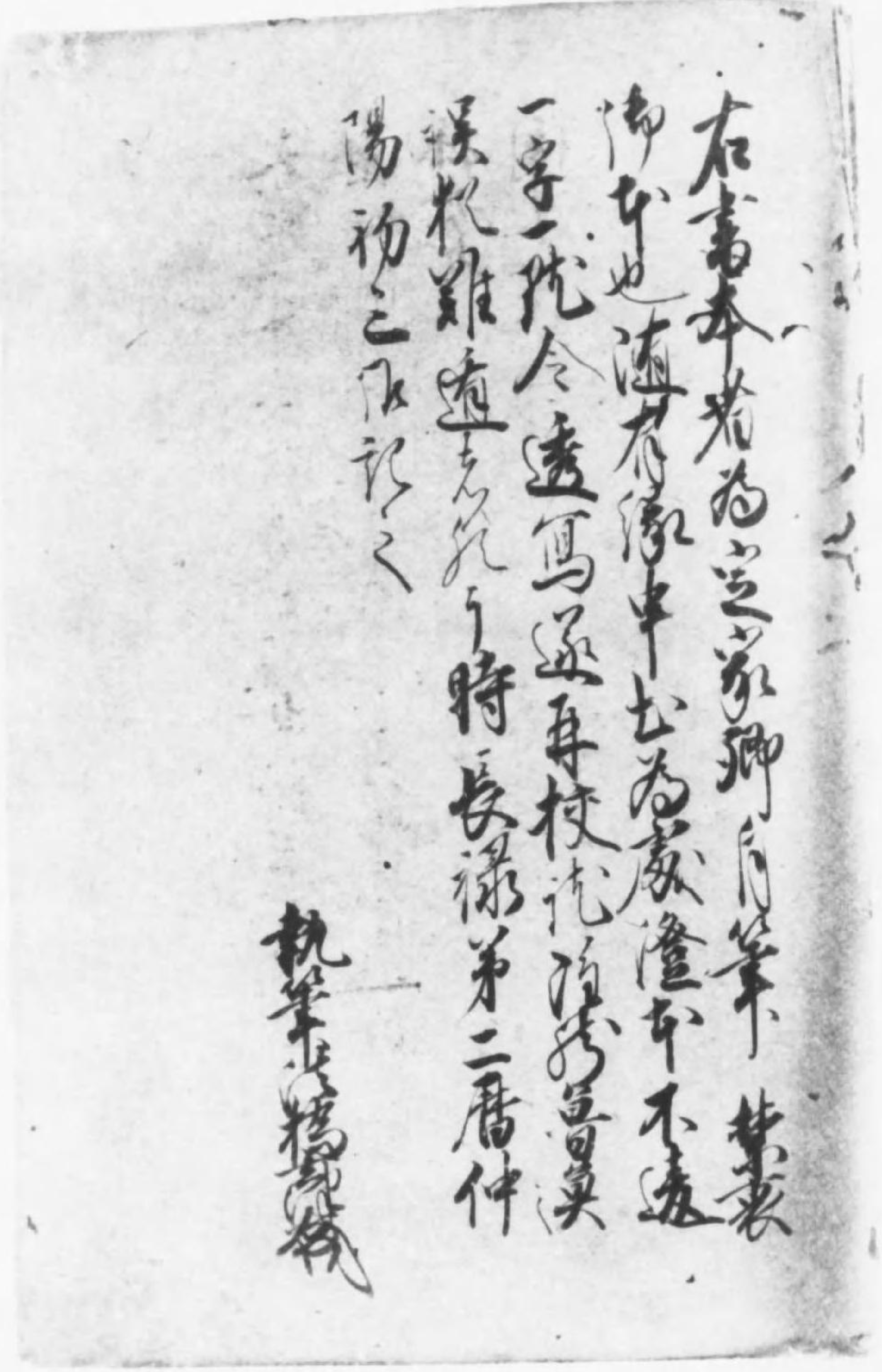
本書は縱八寸三分、横五寸七分、厚き鳥の子を料紙とする胡蝶裝である。　筆者法橋玄津の閲歴は不明であるが、靜嘉堂文庫藏の「徒然草」は正徹の奥書を傳へ、しかも、本書と同筆なれば、玄津は正徹の右筆であつたと見て差支あるまい。　彼の識語によれば、本書は定家自筆なる禁裡御本といふものを、一字一點の相違なく臨寫したものである。　まま魯魚の誤謬は免れ得ないが、天福本の形態考察に缺くべからざる本である。　今卷頭一葉と、法橋玄津の奥書一葉と、正徹自筆の識語とを揚載することとした。



第六圖

法橋玄津筆本伊勢物語（其二）

架藏



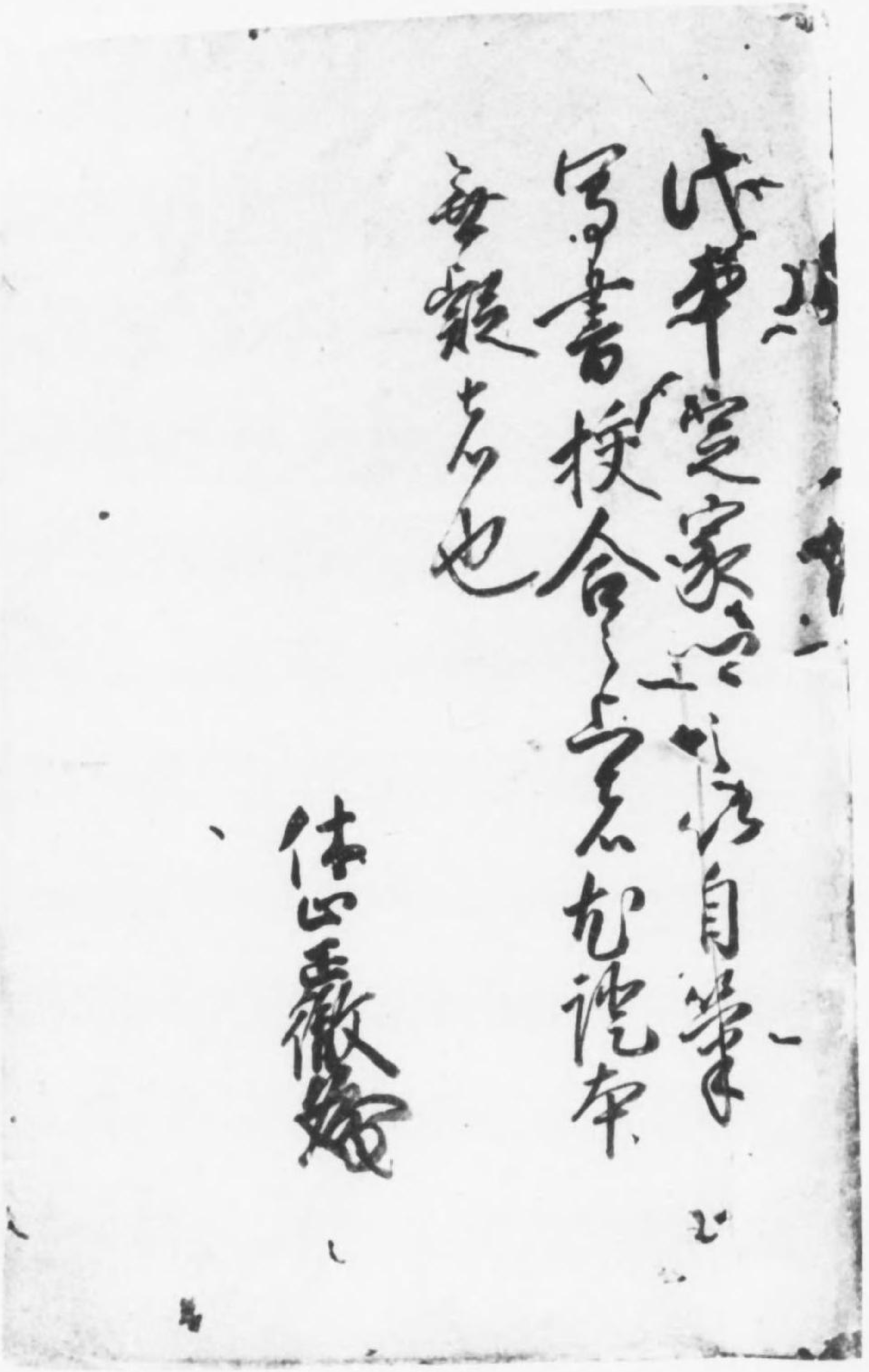
右書本者為定家卿自筆、禁裏
御本也、猶於禁中書為叡覽、不違
一字一點令透寫、遂再校訖、頗為莫
誤、粗雖透写之、于時長祿第二暦仲
陽初三日記之

執筆

第七圖

法橋玄津筆本伊勢物語（其三）

架藏



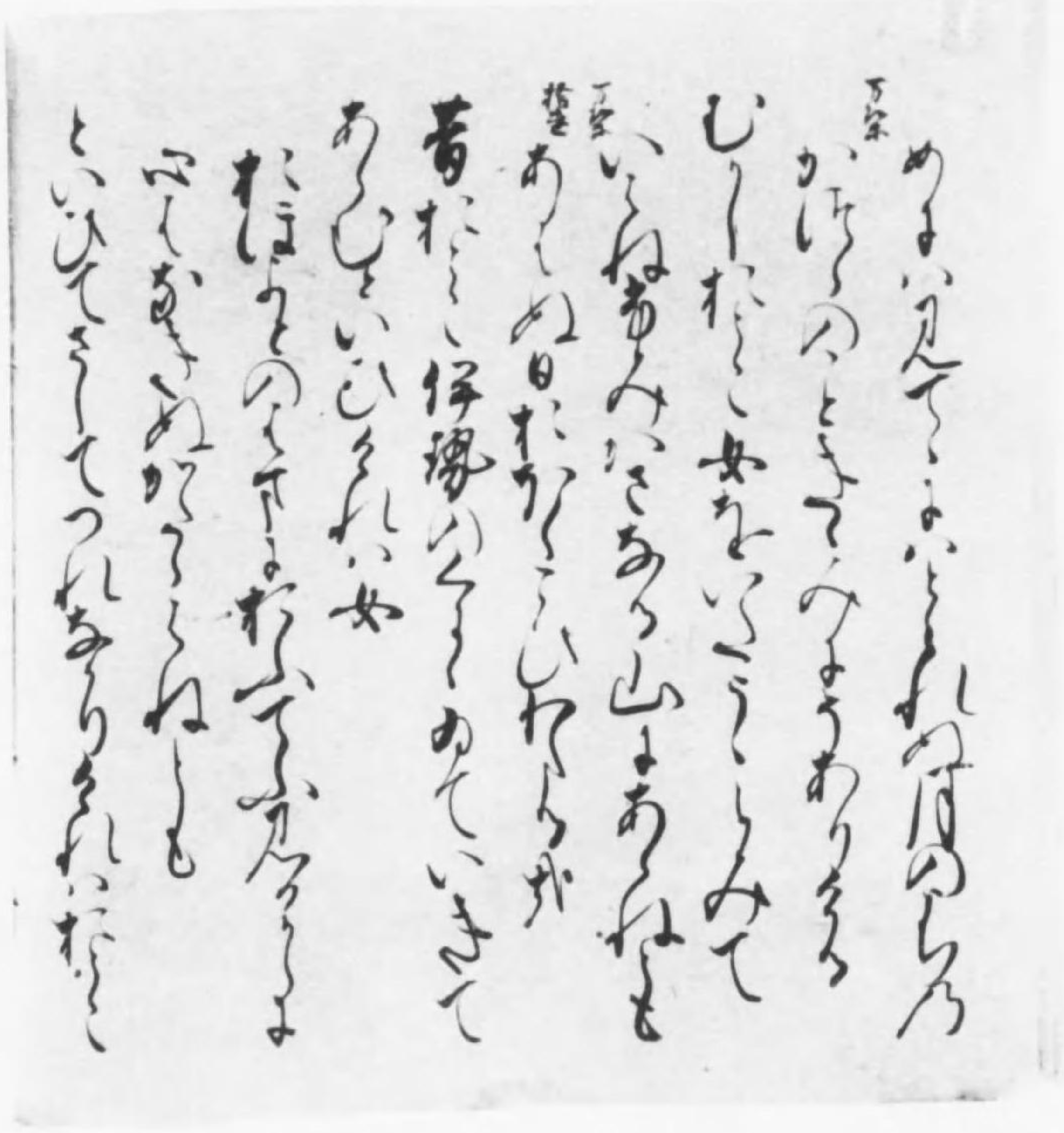
此本定家卿以自筆
写書挍合之尤證本
無疑者也
休心齋

第八圖

逍遙院筆本伊勢物語

三條西伯爵家藏

本書は縦五寸六分、横五寸七分弱、鳥の子を料紙とする胡蝶裝で、逍遙院三條西實隆自筆なることは、書風・紙質・墨色等より推しても、近衞前久の證言に照しても、動かぬところであらう。識語によれば、相傳の本を以て書寫し、五歳の孫女に授けたとあるから、傳定家筆本と本文・勘物はもとより、行數・字詰・書體等に於ても一致すべく思はれるが、事實は必ずしもさうでない。ここには天福本と他本との識別上重要なる語句の一つである「かさなる山にあらねども云々」の箇所を掲げることとした。



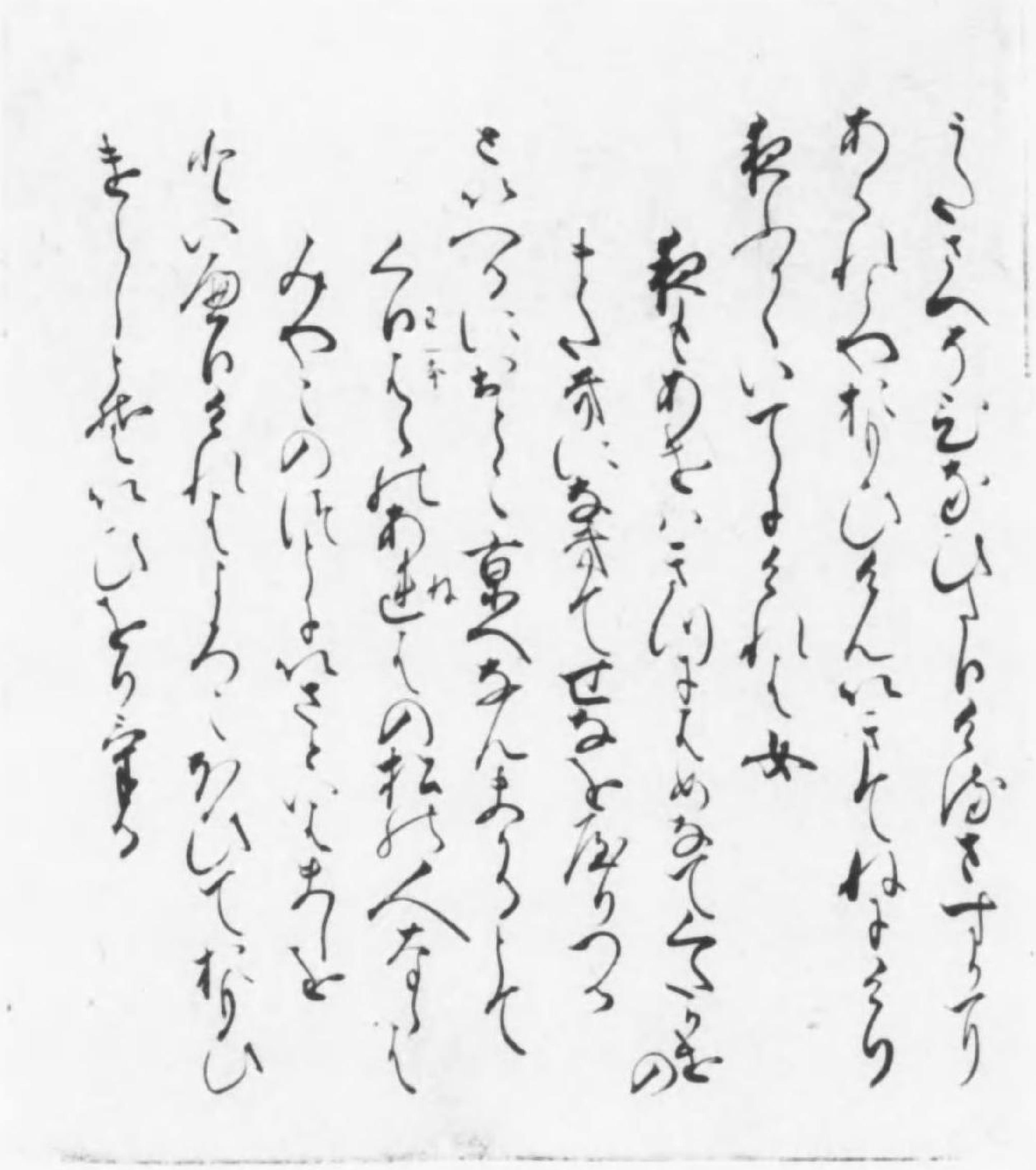
めにはみてゝにはとられぬ月のうちの
かつらのことききみにそありける
むかしをとこ女をいたうらみて
いはねふみかさなる山にあらねとも
あはぬ日おほくこひわたるかな
昔をとこ伊勢のくにゝゐていきて
あらむといひけれは女
おほよとのはまにおふてふみるからに
こゝろはなきぬかたらはねとも
といひてましてつれなかりけれはをとこ

第九圖

三條西實隆筆本伊勢物語（其一）

三條西伯爵家藏

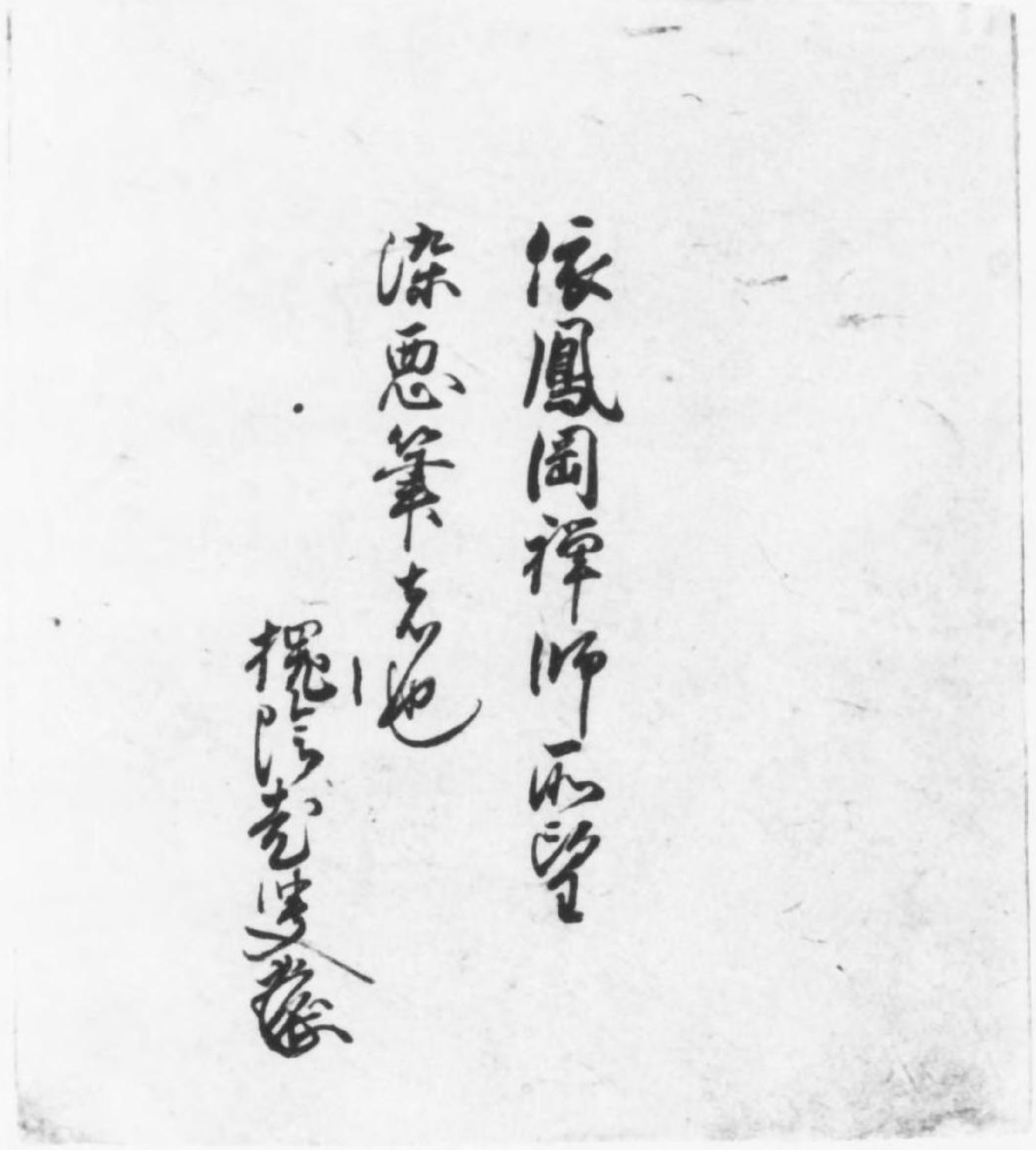
此の伊勢物語は、縱五寸九分五厘、横五寸六分五厘の鳥の子、胡蝶裝の册子で、三條西實隆筆なることは、筆跡・署名・花押・紙質・墨色等から推して肯定される。奥には「一本奥書」として、武田本奥書を轉載するのみで、天福本の勘物・奥書は具備してゐない。よつて完全なる天福本の形態は此の本に求められないが、本文は天福本の系統に屬するものである。本圖に於ては「くりはらのあれはの松の云々」の歌の箇所を採り、以て天福本系統の特徴の一を示すこととした。



第一〇圖

三條西實隆筆本伊勢物語（其二）

三條西伯爵家藏

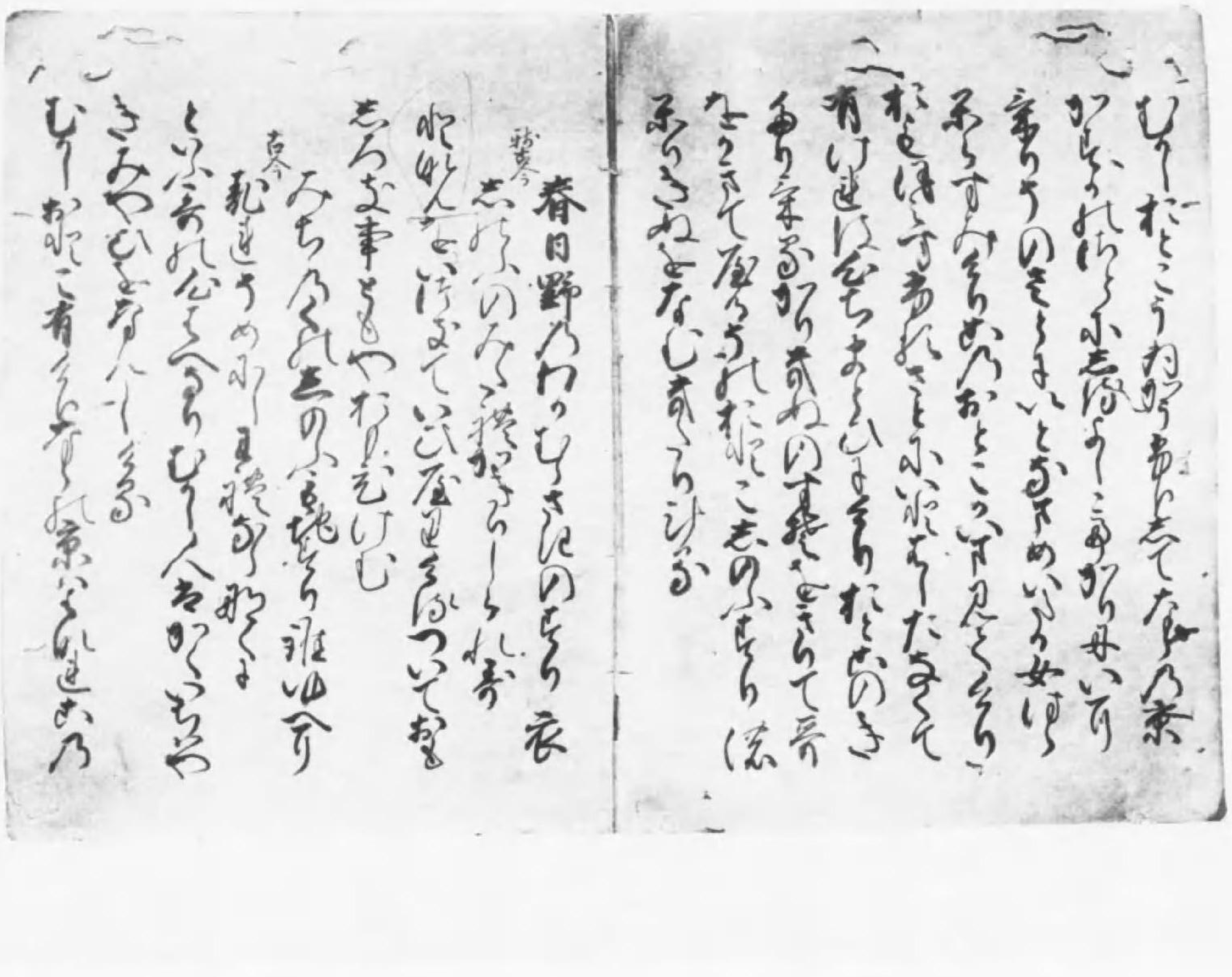


依鳳岡禪師所望
染惡筆者也
槐陰老叟

第一二圖

傳牡丹花筆本伊勢物語　　架藏

縦八寸三分、横五寸六分五厘。　装潢は鳥の子胡蝶裝。　行間に勘物はないが、業平以下の略歴、なぞへなく、みやびの釋義、奥書など、一般の天福本の如くである。　次に「本云以京極黄門定家卿自筆兩本校合訖　以黄門筆不違一字書寫之本又同拔之者也」と記し、更に流布本奥書と「近代以狩使事爲端之本出來云々」の奥書を掲げ、最後に「右兩本之奥書追書加之畢」と結んでゐる。　筆者竹柏といふ確證は存しないが、書寫年代はまさに彼の時代である。　今卷頭見開を圖版に收めることととした。



むかしおとこうゐかうぶりしてならの京
かすがのさとにしるよしゝてかりにいにけり
そのさとにいとなまめいたる女はら
からすみけりこのおとこかいまみてけり
おもほえずふるさとにいとはしたなくて
有ければ心ちまどひにけりおとこのき
たりけるかりぎぬのすそをきりて哥
をかきてやるそのおとこしのぶずり
のかりぎぬをなむきたりける

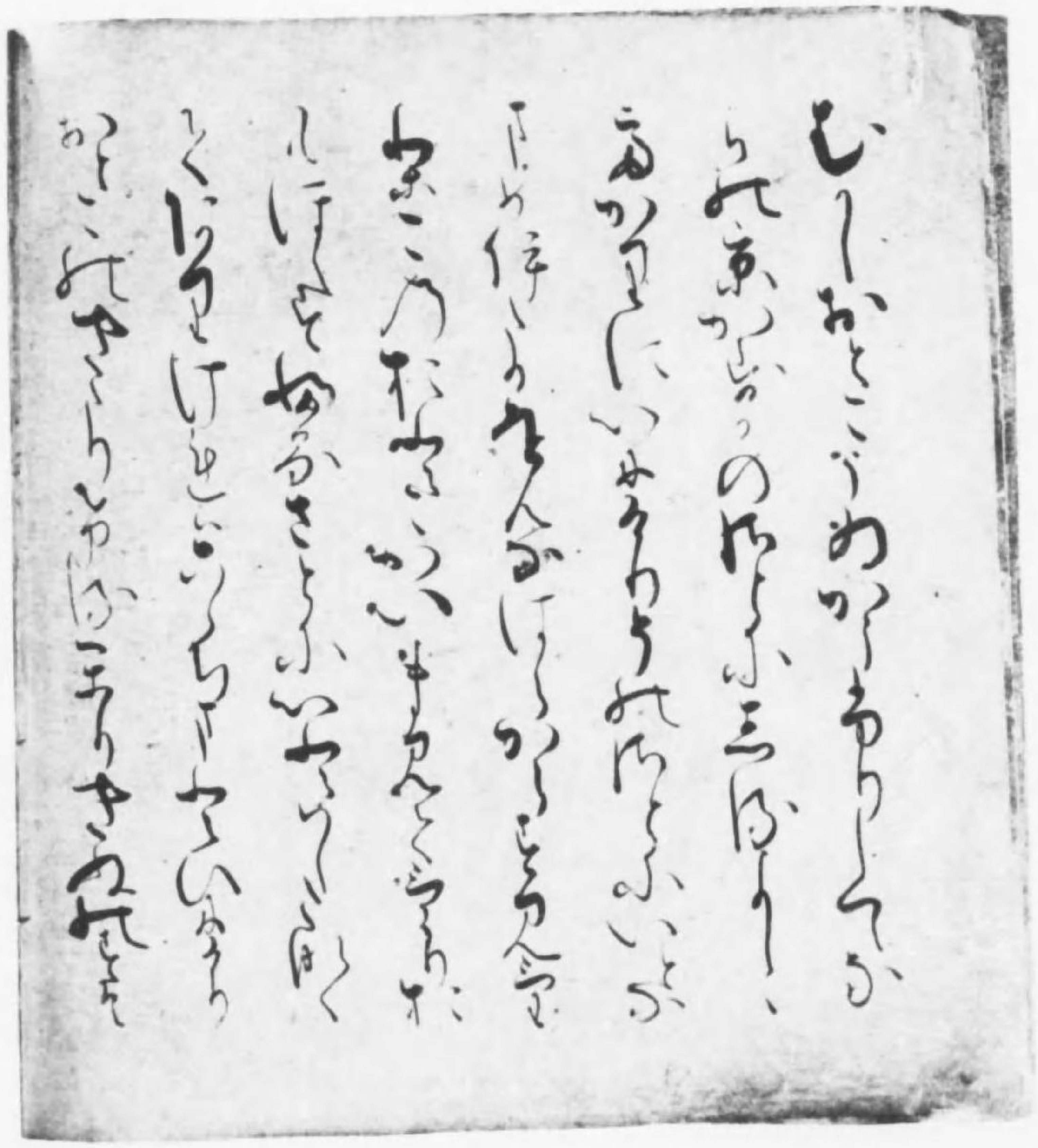
春日野のわかむらさきのすり衣
（新古今）しのぶのみだれかぎりしられず
となむおいつきていひやりけるついでおも
しろき事ともやおもひけむ
みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに
（古今）みだれそめにし我ならなくに
といふうたの心ばへなりむかし人はかくいちはやき
みやびをなんしける
むかしおとこ有けりならの京ははなれこの

第一二圖

東京帝國大學國文學研究室本伊勢物語（其一）

東京帝國大學國文學研究室藏

本書は縱五寸九分、横五寸八分、厚き鳥の子の料紙を胡蝶裝として綴ぢ、これに天福本を書寫したものである。筆者に關しては未だ明徵を得ないが、大永四年九月桑門伊成の加へた識語によつて、少くともそれ以前の書寫に係るものなることは確かである。然しその書風・紙質・墨色等よりして、大永を遠く遡るとも考へられない。今卷頭一葉と、伊成の識語とを採つて、圖版に收めることとした。



第一三圖

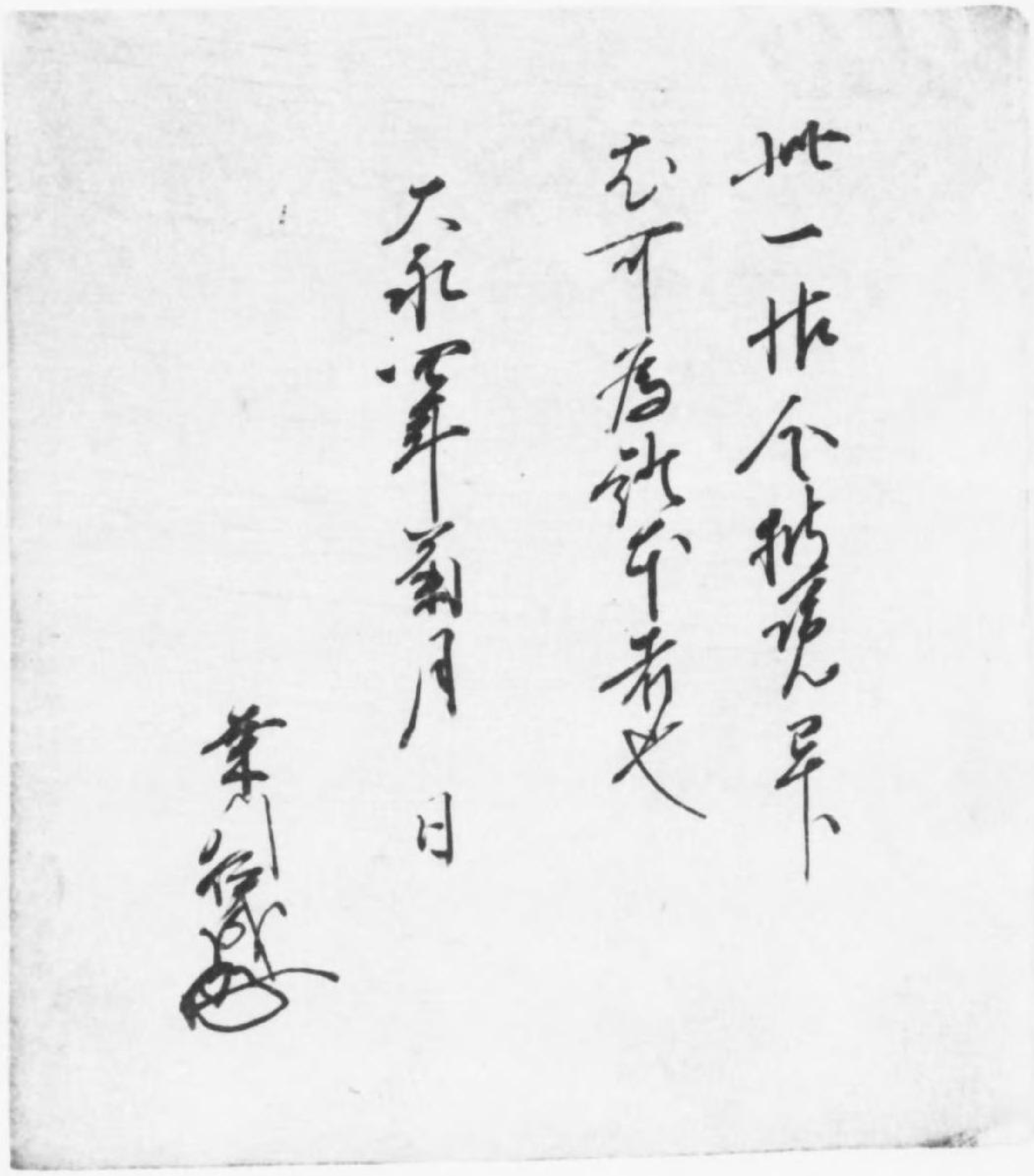
東京帝國大學國文學研究室本伊勢物語（其二）

東京帝國大學國文學研究室藏

東京帝國大學國文學研究室藏

東京帝國大學國文學研究室本伊勢物語（其二）

第一三圖



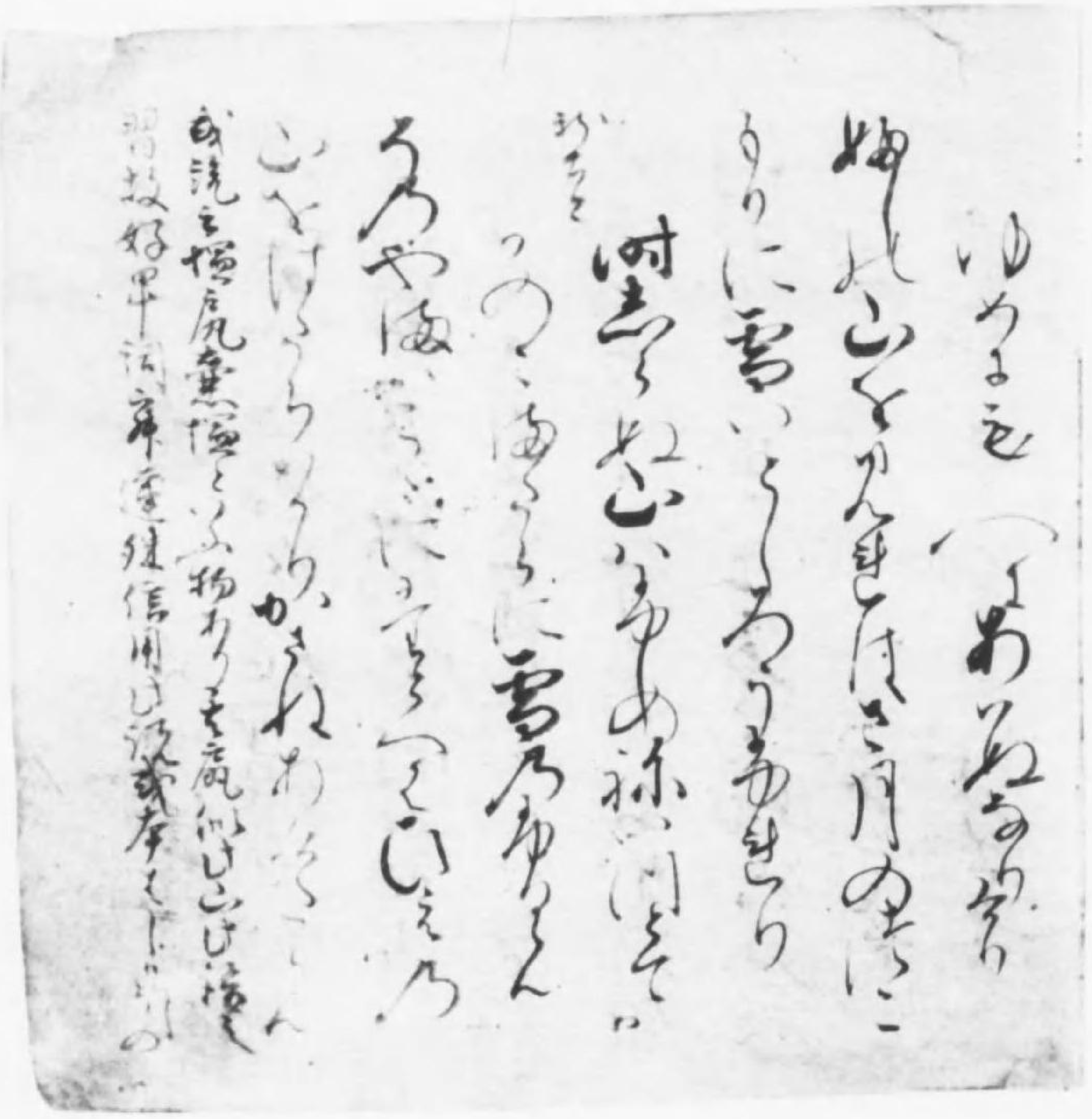
此一帖令校見畢不
足可爲證本者也
大永四年菊月　日

第一四圖

傳二條爲重筆本伊勢物語

三條西伯爵家藏

本書は縦四寸九分、横五寸一分、斐紙、胡蝶装の册子で、古筆了音の極札によれば、二條爲重筆といふ。　果して爲重筆なるや否やを決する明證はないが、書風・紙質・墨色・手づれその他より推して、先づ南北朝末期の書寫と見て恐らく大過ないであらう。　この本には識語なく、その系統・傳來についての證據は全くないが、本文は天福本系統に屬するものである。　今本文一葉を撮つて圖版となし、天福本勘物の一班を示すと共に、あはせて系統識別の一助とすることとした。

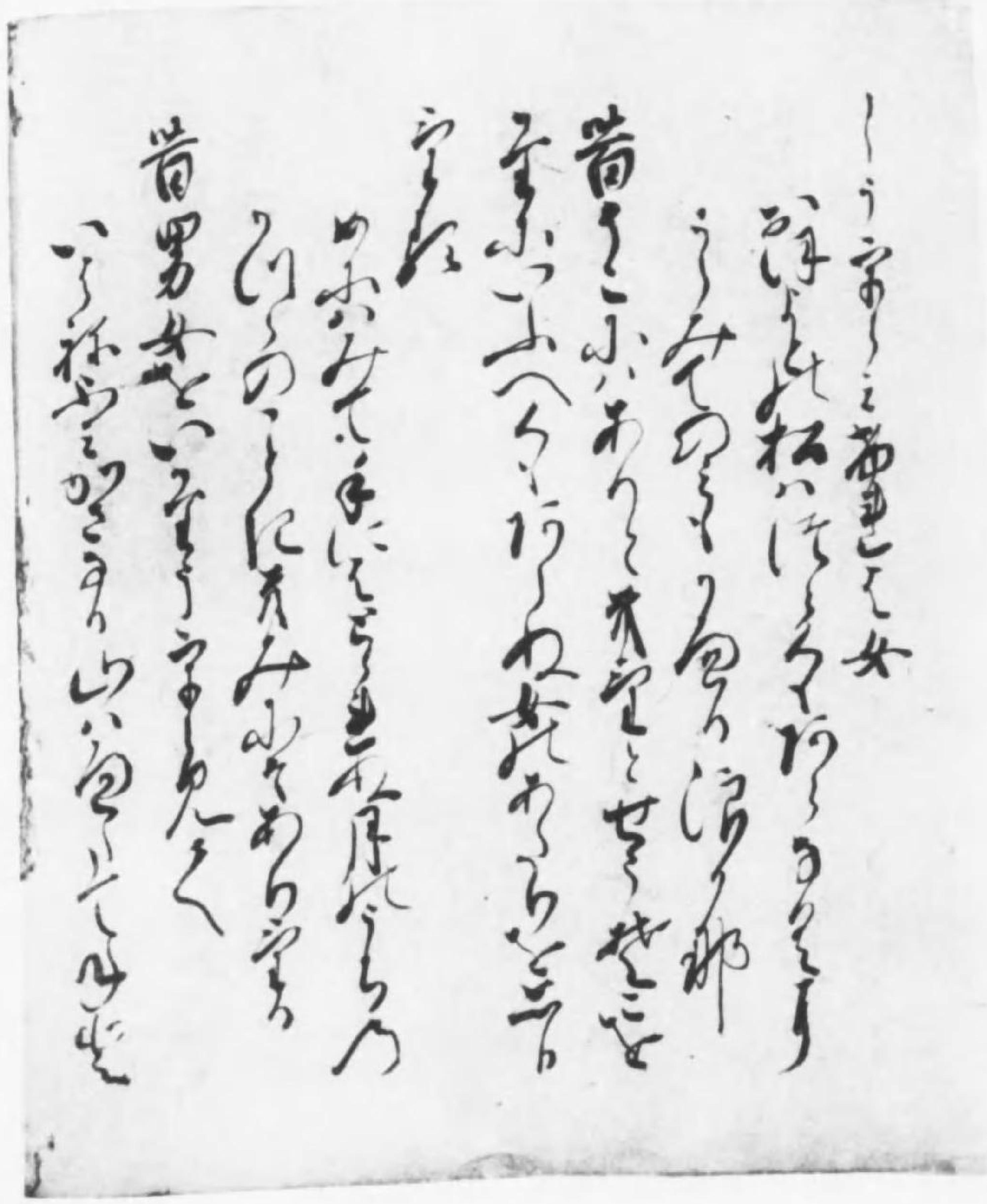


第一五圖

傳尊應准后筆本伊勢物語（其一）

三條西伯爵家藏

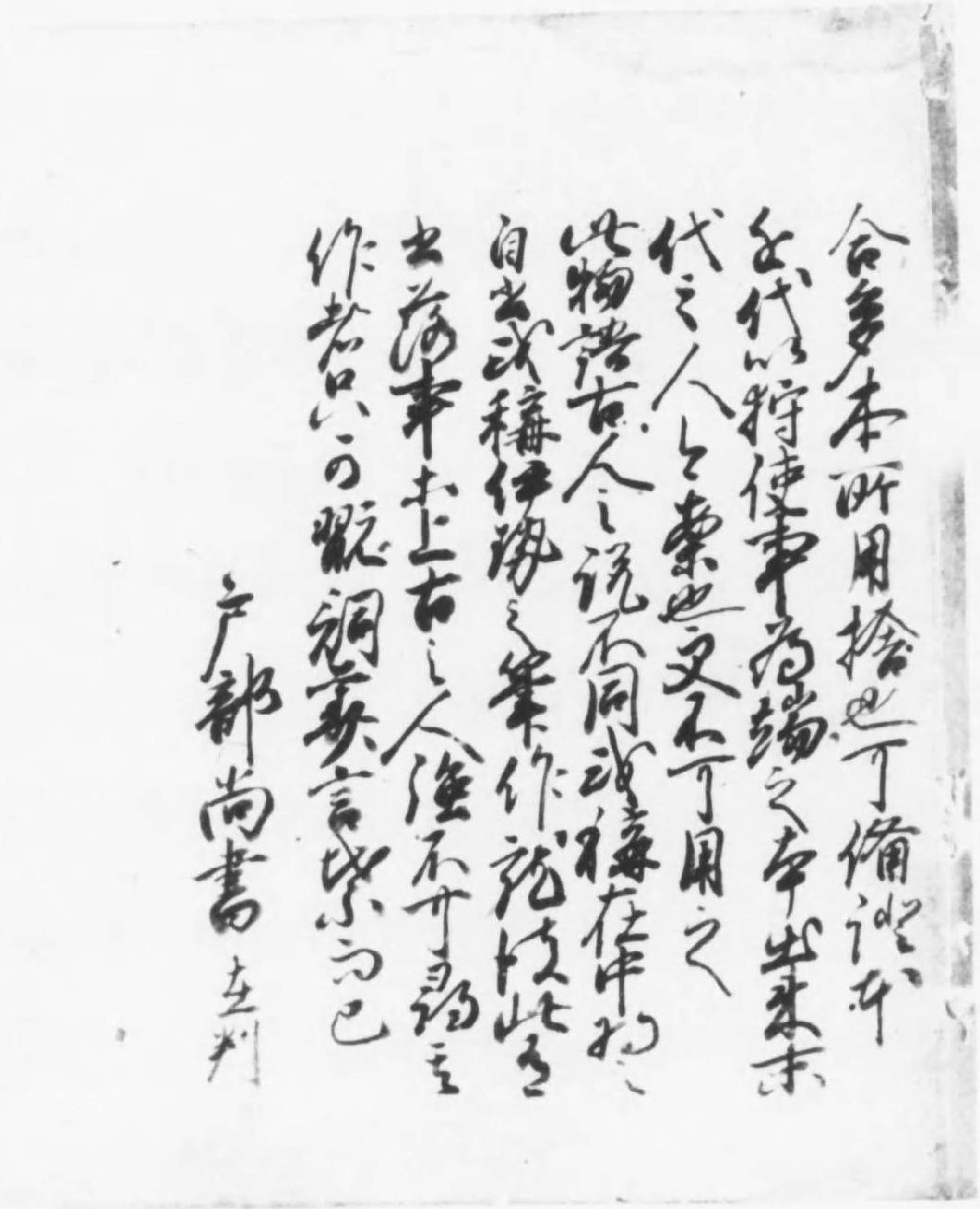
本書は縱五寸八分弱、横五寸三分、鳥の子、胡蝶裝の一帖で、極札には青蓮院殿尊應准后御筆とあれど眞疑もとより不明である。書寫年代は略室町中期に遡り得るものか。本文の系統は武田本に屬し、勘物には二三脫落あるも、なほ奥書を具備し、更に「所持堯惠」「こ五うへまいらせ候」と奥に記してゐる。今前掲天福本と對照するため「かさなる山はへだてねど云々」の歌の箇所一葉と武田本たることを示す奥書一葉とを圖版として掲載することとした。



第一六圖

傳尊應准后筆本伊勢物語（其二）

三條西伯爵家藏



合多本所用捨也可備證本
但於狩使事者端之本出來末
代之人定案也又不可用之
此物語古人之說不同或稱在中將之
自書或稱伊勢之筆作就彼此有
書落事於上古之人強不可尋之
作者只可翫詞華言葉而已

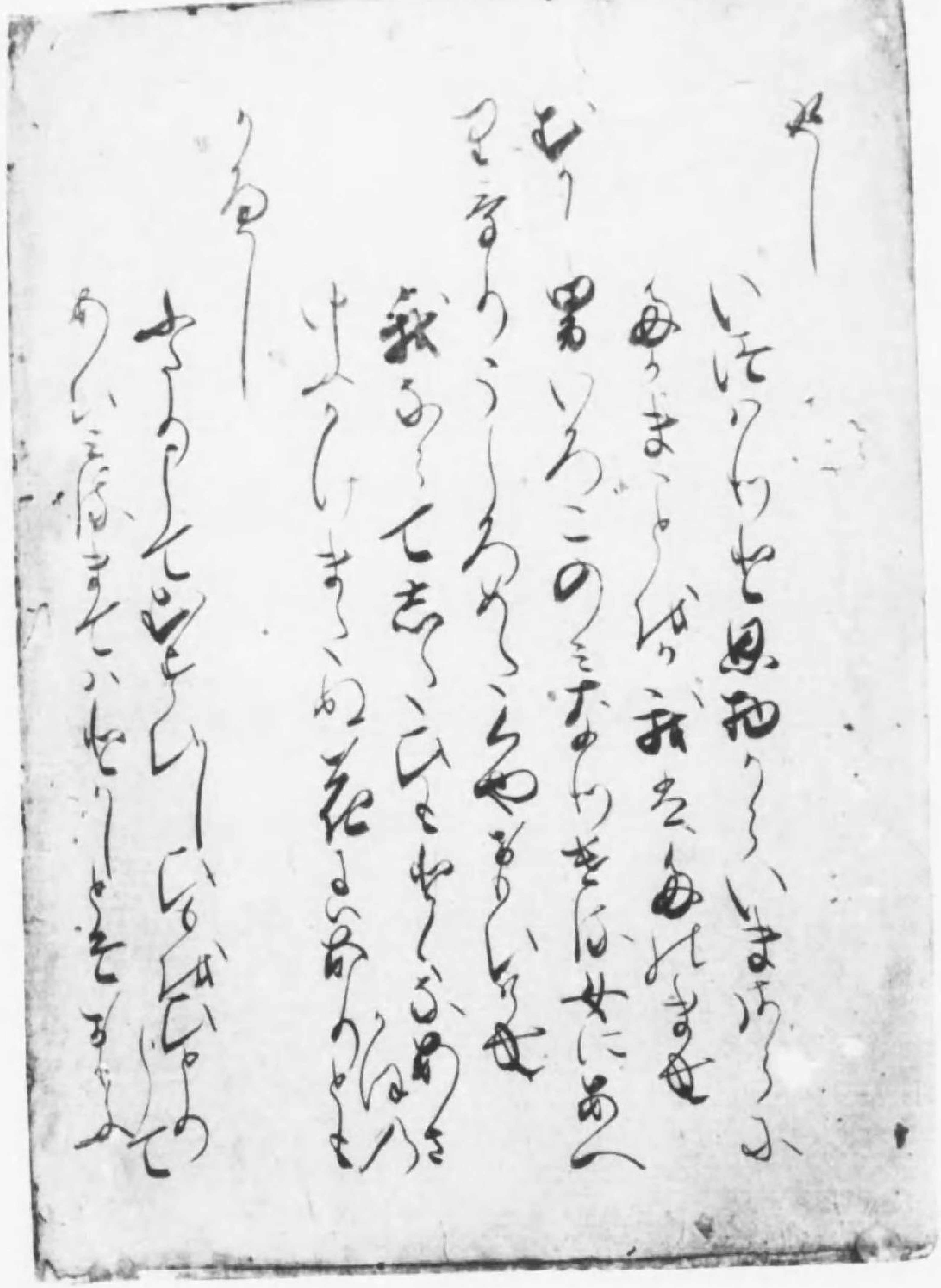
戸部尚書 在判

第一七圖

高野本伊勢物語（其一）

高野辰之博士藏

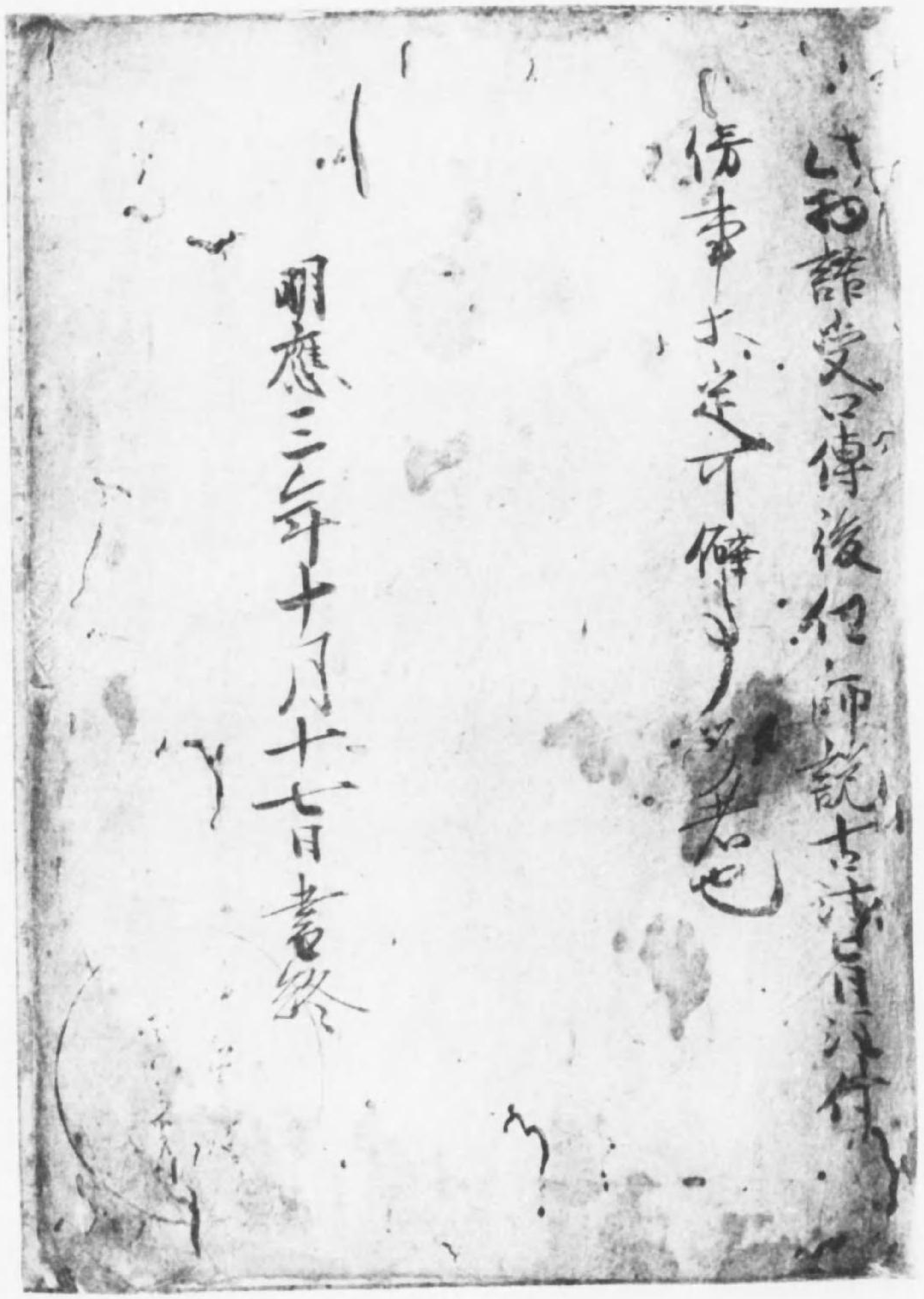
本書は縦七寸三分、横五寸六分、鳥の子、胡蝶装の一帖で、墨付七十一枚、筆者は誰とも分らないが、明應三年の書寫に係るものである。本書の特色は第三十六段「むかしわすれぬるなめり云々」の條に「いつはりと思物からいまさらにたかまことをか我はたのまむ」なる返歌を有する點である。蓋しこの返歌は、普通定家本に見られぬところで、このために本書は奥書の嚴として存するにも拘らず、武田本に包含せしむべきや否やの疑問を生ぜしめる。今問題の箇所と卷末一葉とを圖版に收めた。



第一八圖

高野本伊勢物語（其二）

高野辰之博士藏



此物語受口傳後任師説古注之付
傍事於定可僻[illegible]者也

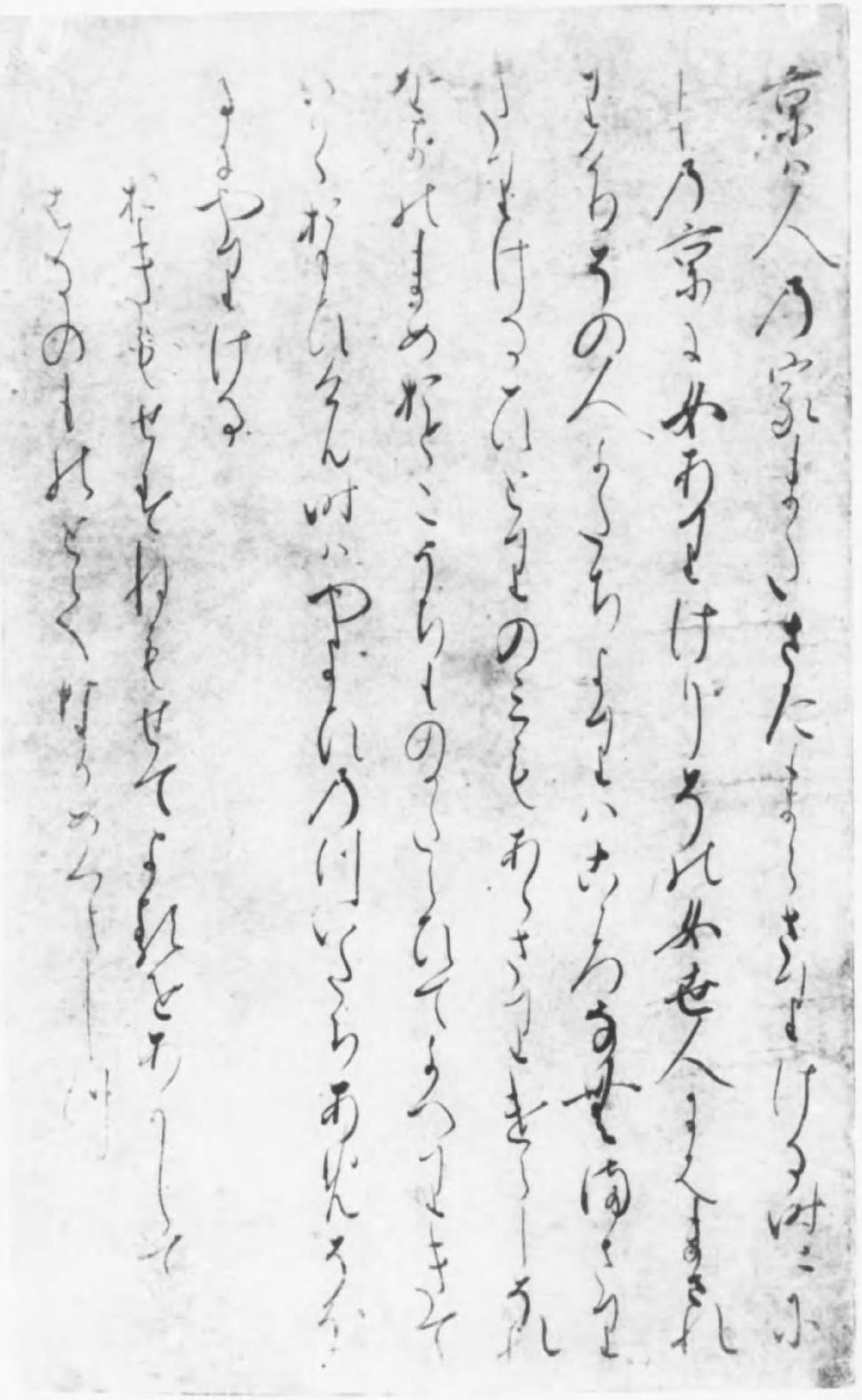
明應三年十月十七日書終

第一九圖

千葉本伊勢物語（其一）

千葉胤明氏藏

此の伊勢物語は縱八寸、横五寸三分、胡蝶裝の册子で、料紙は斐紙、五葉二つ折、六葉・八葉・七葉各二つ折、六葉二つ折に一張を貼付し、二葉二つ折二くくり、以上七くくりを一帖とする。　墨附凡て九十一張。　その筆者は詳かにし得ないが、書寫年代は筆跡・紙質・墨色・手づれ・其他から推して、鎌倉末期を下るまいと考へられ、現存流布本系統の諸本の中に於て最古のものと認められる。　今本文一葉と、流布本奥書とを圖版として本書の面目の一端を示すこととした。



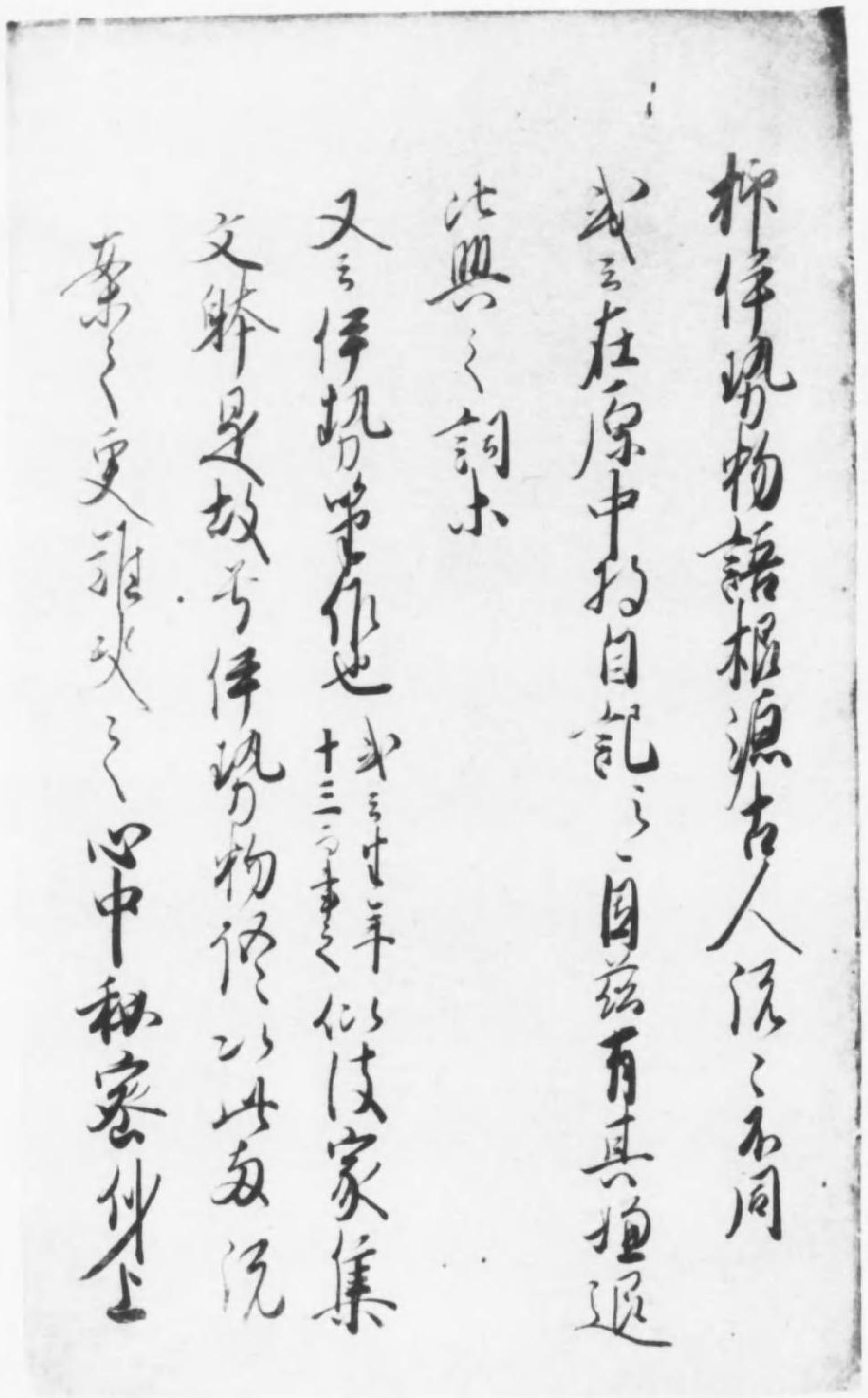
第二〇圖　千葉本伊勢物語（其二）

千葉胤明氏藏

千葉本伊勢物語（其二）

第二〇圖

千葉胤明氏藏

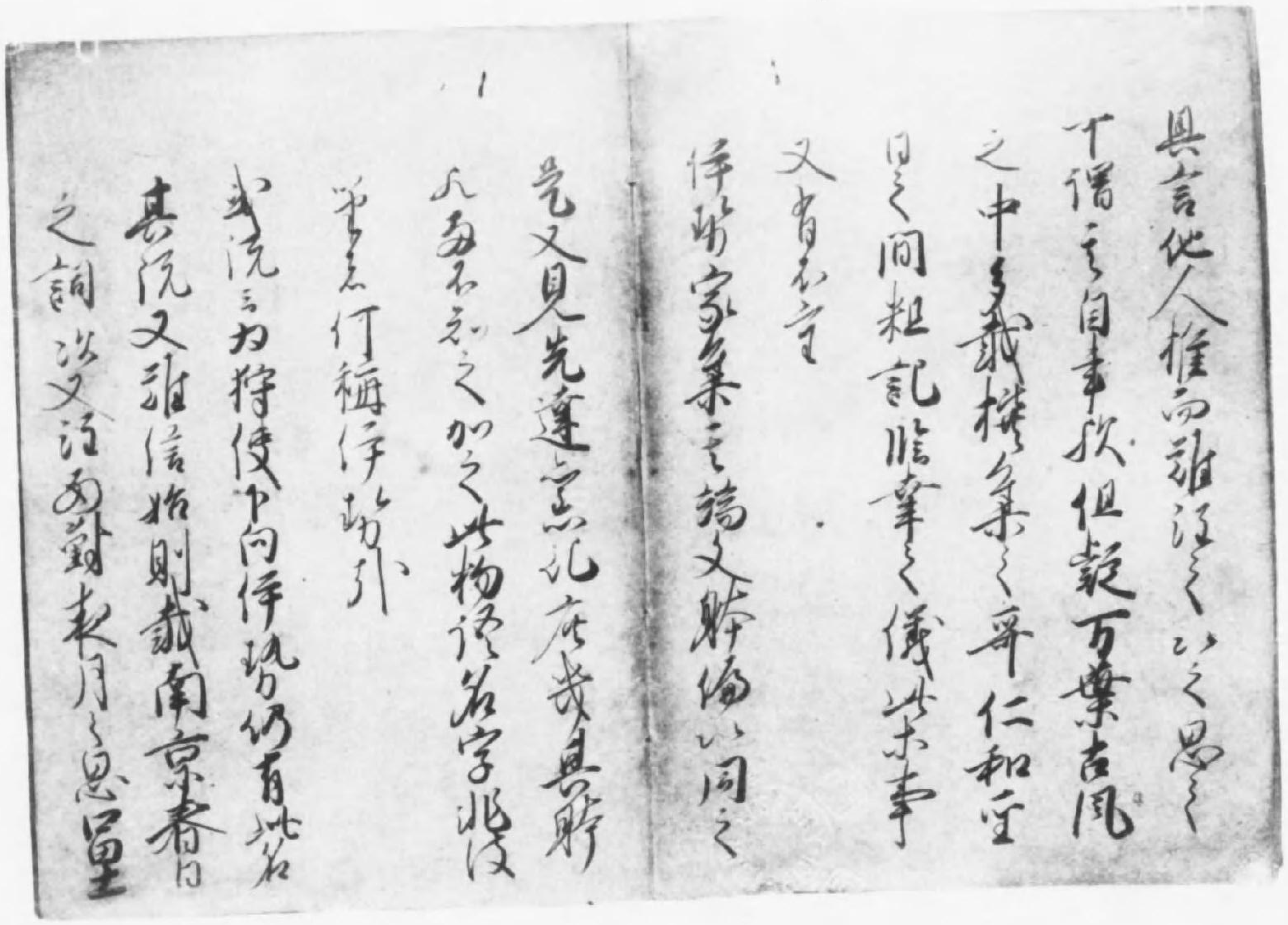


抑伊勢物語根源古人説〻不同
或云在原中将自記之自茲有其撞退
此興之詞等
又云伊勢筆作也（或云生年十三之書之仍彼家集）
文躰是故号伊勢物語以此為説
葉〻更雖改之心中秘密仰上

第二一圖

千葉本伊勢物語（其三）

千葉胤明氏藏



第二一圖

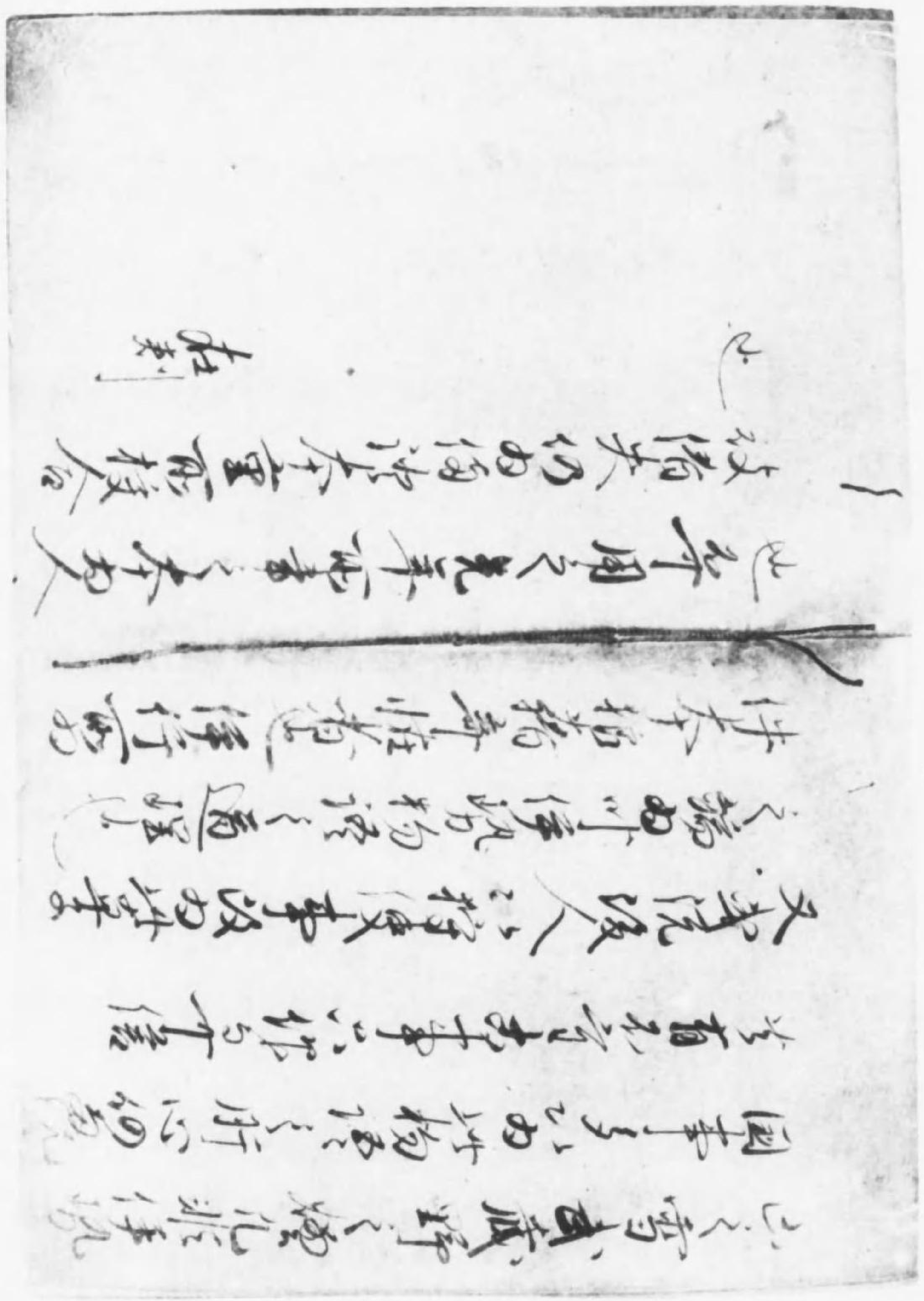
千葉本伊勢物語（其三）

千葉胤明氏藏

第二二圖

千葉本伊勢物語（其四）

千葉胤明氏藏



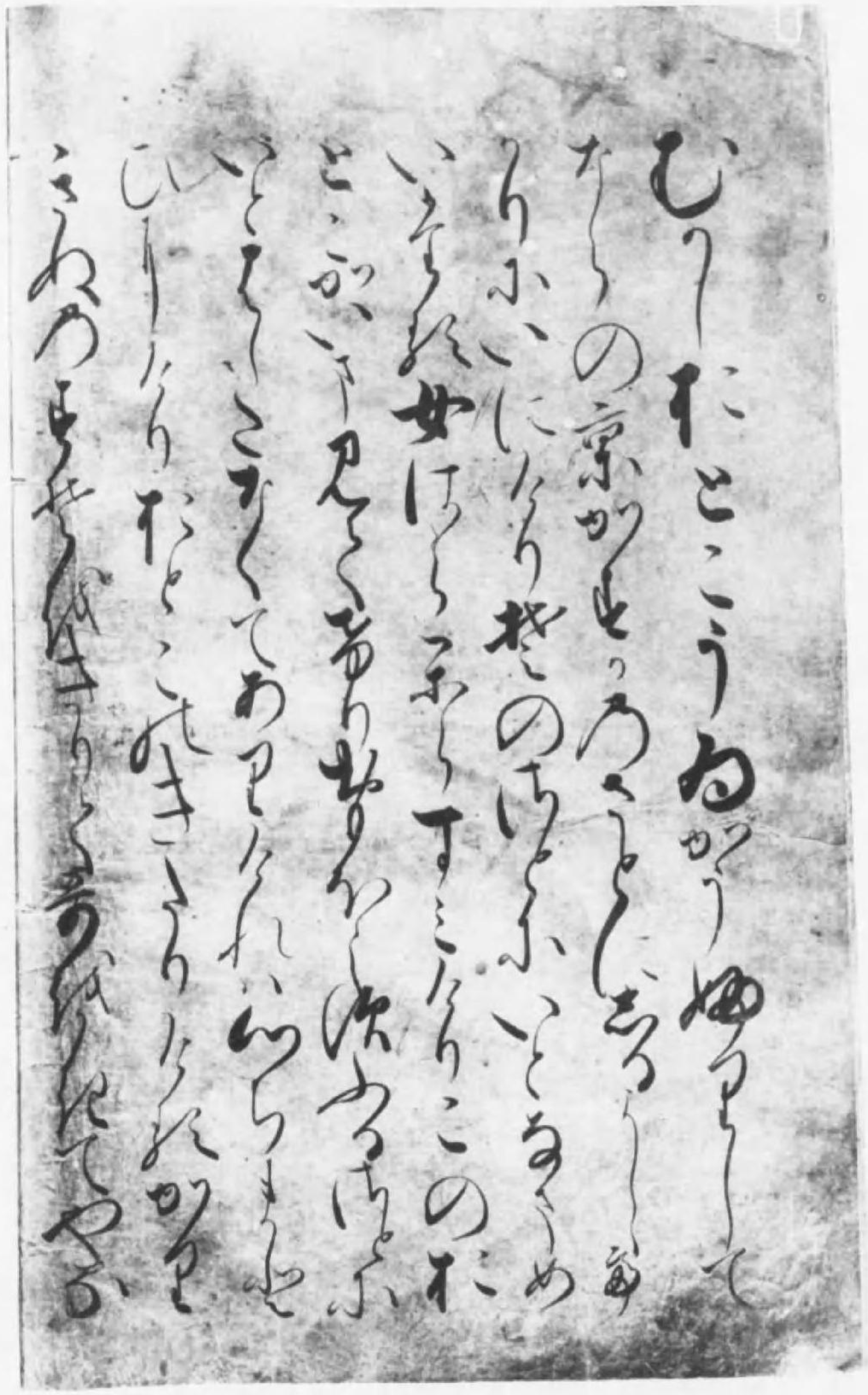
2/10

第二三圖

七海本伊勢物語

七海兵吉氏藏

本書は縦八寸六分弱、横五寸五分の鳥の子、胡蝶裝。現在墨附は九十二枚であるが、本文に二枚落張の跡が見出される。筆者は明かでないが、宮內省圖書寮所藏傳飛鳥井雅世筆本伊勢物語に近似し、書風柔くかつ圓みを帶び、十分の落着を示す。又別に紙質・墨色等より推しても、兩者略同時代の書寫かと思はれる。此の本は千葉本と共に流布本系統の中にあつて、爲相の識語ある一群に對して又別に小異ある一類を成す。今圖版として示したものはその卷頭の一葉である。

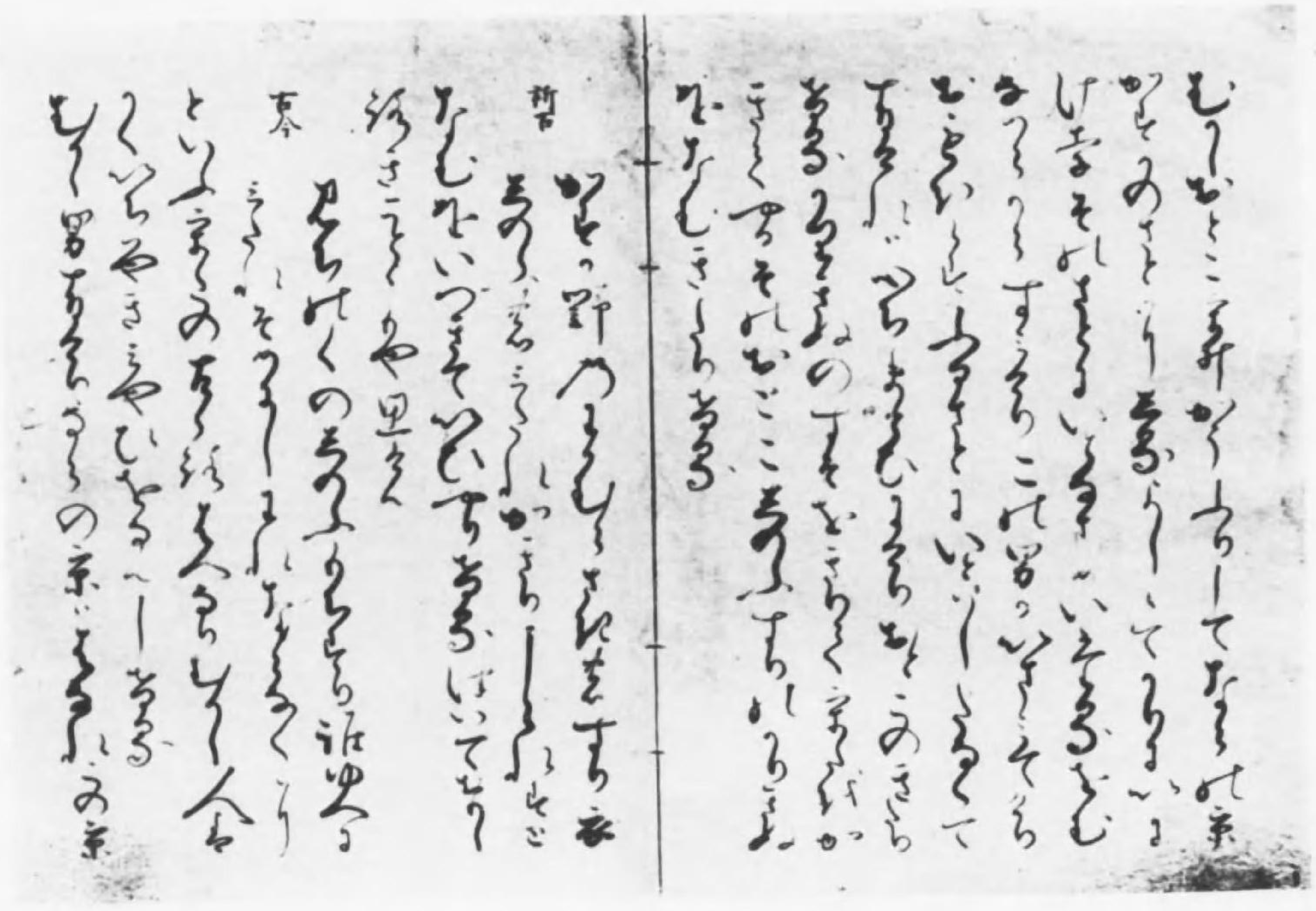


第二四圖

山崎宗鑑筆本伊勢物語

架藏

本書は縦八寸一分強、横五寸五分五厘、鳥の子、胡蝶装の册子である。古筆了佐の極書に「右者山崎住人宗鑑筆蹟分明也」とあるが如く、その山崎宗鑑自筆なることは、同じく宗鑑筆と傳ふる所の架藏源氏物語初音の卷、永山近彰氏藏伊勢物語、松田武夫氏藏金葉集・新古今集及び愚問賢註と比較する事によつて明白である。系統上より見れば、本文は宮内省圖書寮藏飛鳥井雅世筆本と共に、爲相の識語ある流布本に屬し、誤寫も少い善本である。今卷頭見開を圖版として掲げた。

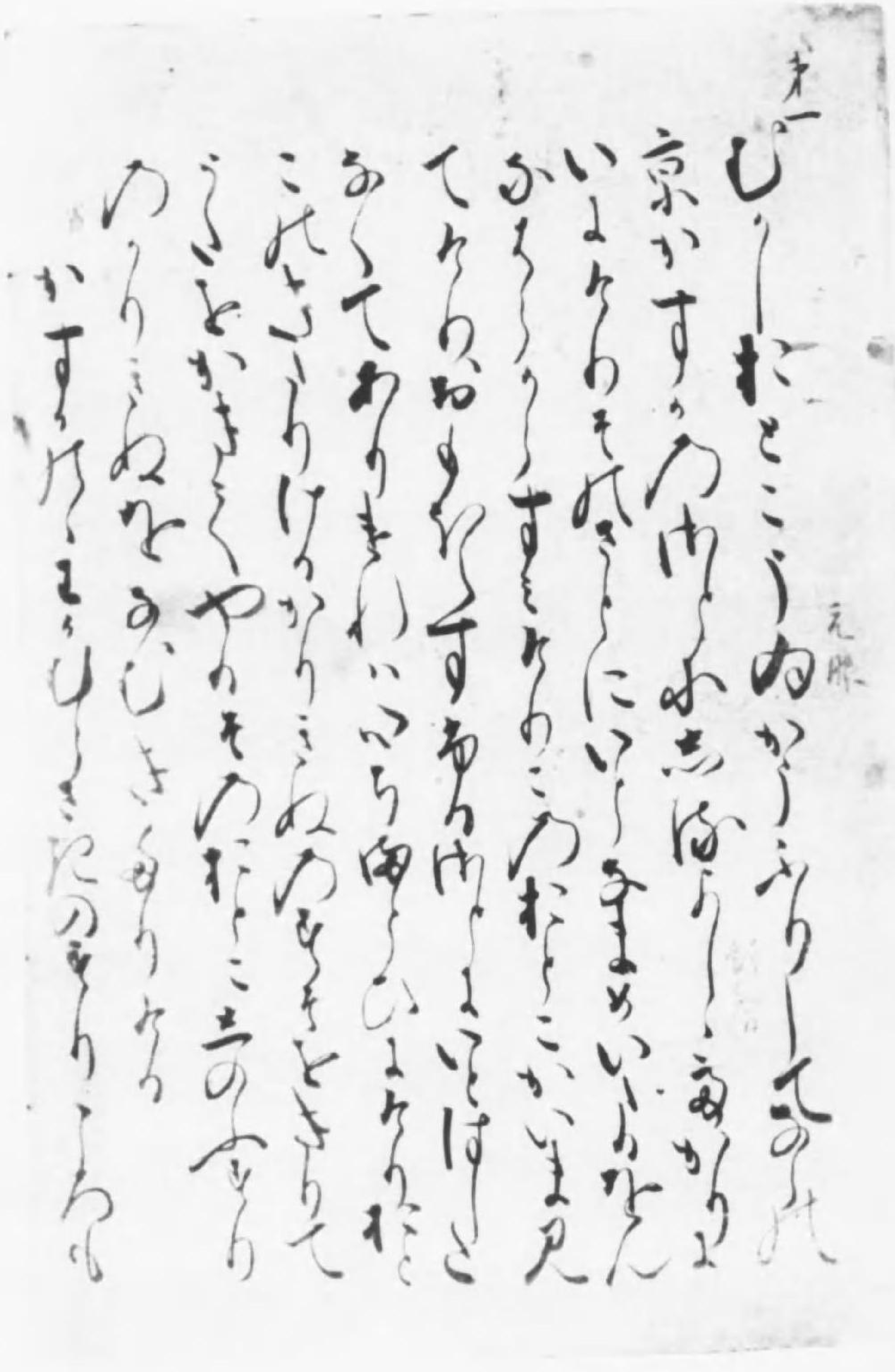


第二五圖

一條兼良本伊勢物語（其一）

架藏

此の伊勢物語は縱約八寸一分、横五寸八分、鳥の子、胡蝶裝の冊子で、墨附すべて七十四枚ある。奥に桃華老人卽ち一條兼良の識語があるが、本書は果して兼良自筆か否か明徵は存しない。然し大略兼良の時代より遠からざる頃の書寫にかかるものなることは疑ない。系統は流布本に屬するが、「抑伊勢物語根源云々」の奥書はこれを省略して、圖版に見ゆるが如く「此物語古人之說々不同云々」から始めてゐる。今卷頭一葉と、奥書見開とを採つて、本書の面影を示すこととした。



第一

むかしおとこうゐかうふりしてならの

京かすかのさとにしるよしゝてかりに

いにけりそのさとにいとなまめいたる女はらか

らすみけりこのおとこかいま見

てけりおもほえすふるさとにいとはした

なくてありけれは心ちまとひにけりおと

このきたりけるかりきぬのすそをきりて

うたをかきてやるそのおとこしのふすり

のかりきぬをなむきたりける

かすかのゝわかむらさきのすりころも

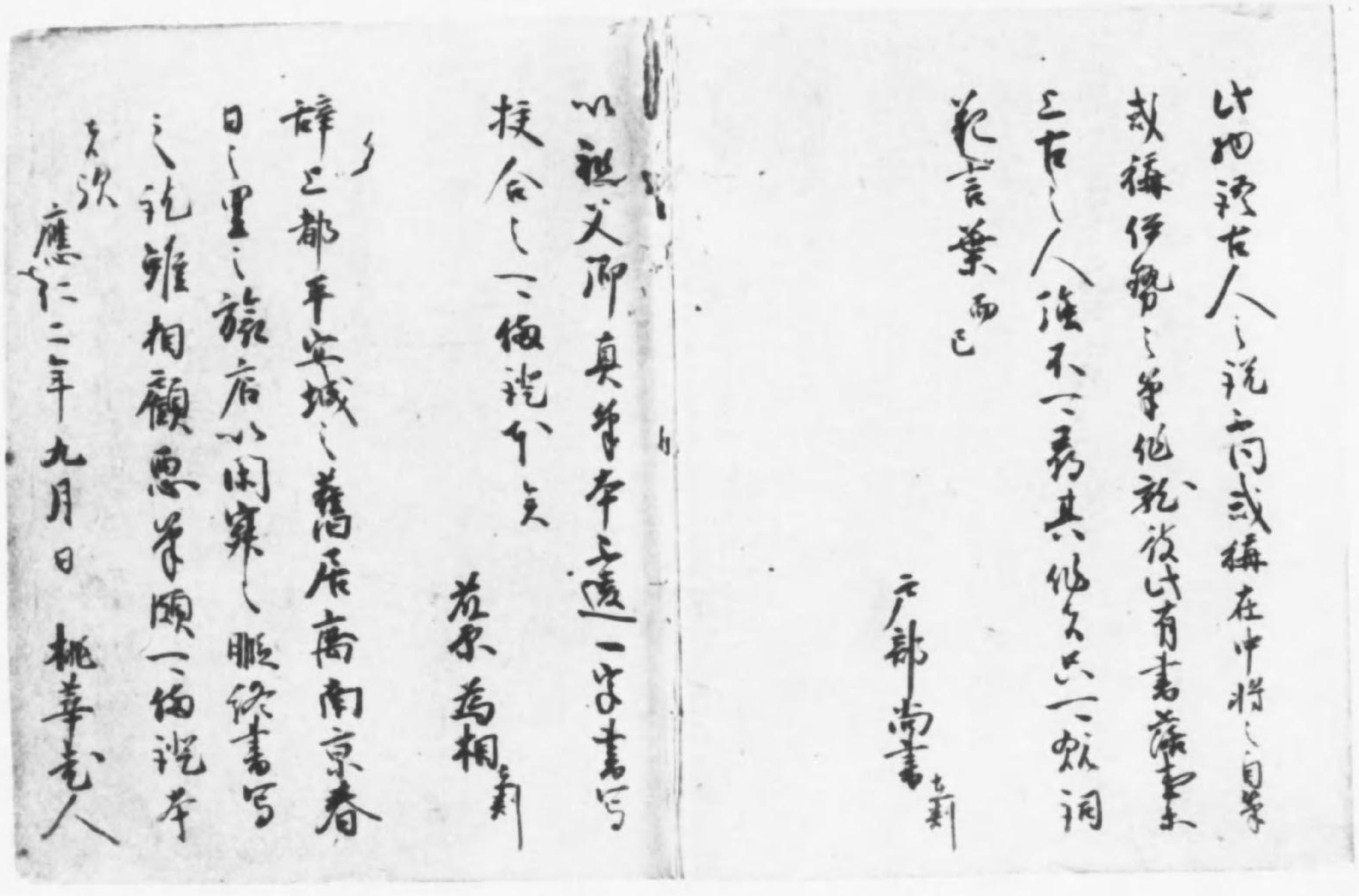
元服

第二六圖

一條兼良本伊勢物語（其二）

架藏

第二六圖
一條兼良本伊勢物語(其二)　某　藏



此物語古人之説云或稱在中將之自筆
或稱伊勢之筆他説猶此有書樣未
定之古之人説不一焉其作又只以一家詞
花言葉而已

戸部尚書

以祖父卿眞筆本不違一字書寫
挍合之一個説了矣

右京爲相

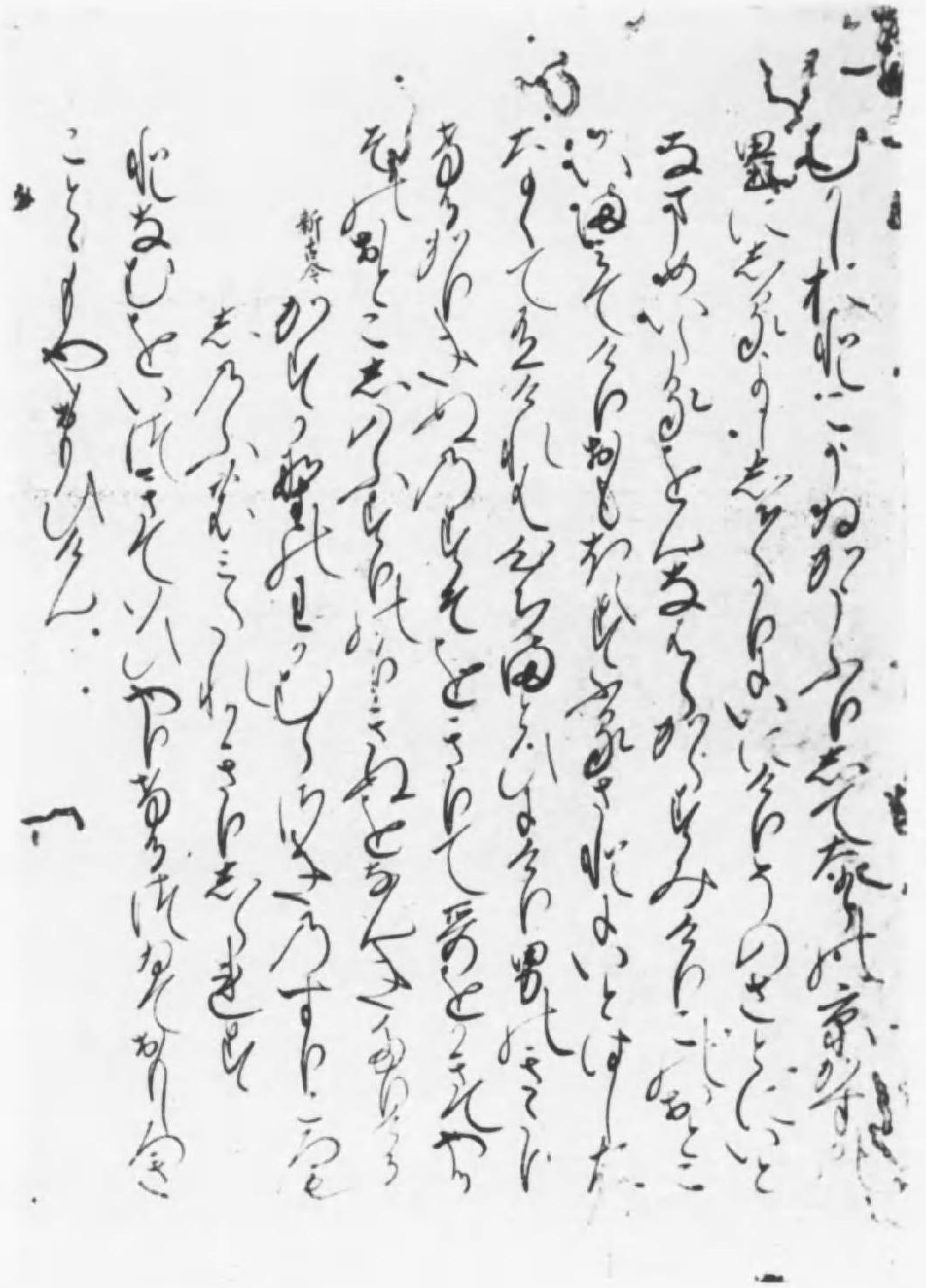
避之都平安城之舊居寓南京春
日之里之旅店以閑寂之眠餘書寫
之説雖相顧愚筆頗一偏説本
之次
應仁二年九月日　桃華老人

第二七圖

傳四條隆重筆本伊勢物語

七海兵吉氏藏

本書は縱八寸四分、横六寸三分五厘、胡蝶裝の册子である。用紙は鳥の子。卷頭扉紙に貼付した極札には、四條殿隆重筆とあるが確證はない。然し書風よりすれば、文明の頃の書寫と思はれる。本文には所々聲點を施し、かつ行間に勘物を記入してゐるが、此聲點・勘物は何れも武田本系統のものである。奥書は所謂流布本奥書と「近代以狩使事爲端本出來云々」の奥書とを併有する。爲相の識語は省いてゐるが、無論流布本系統に屬するものである。今ここに掲げたのは卷頭一葉である。

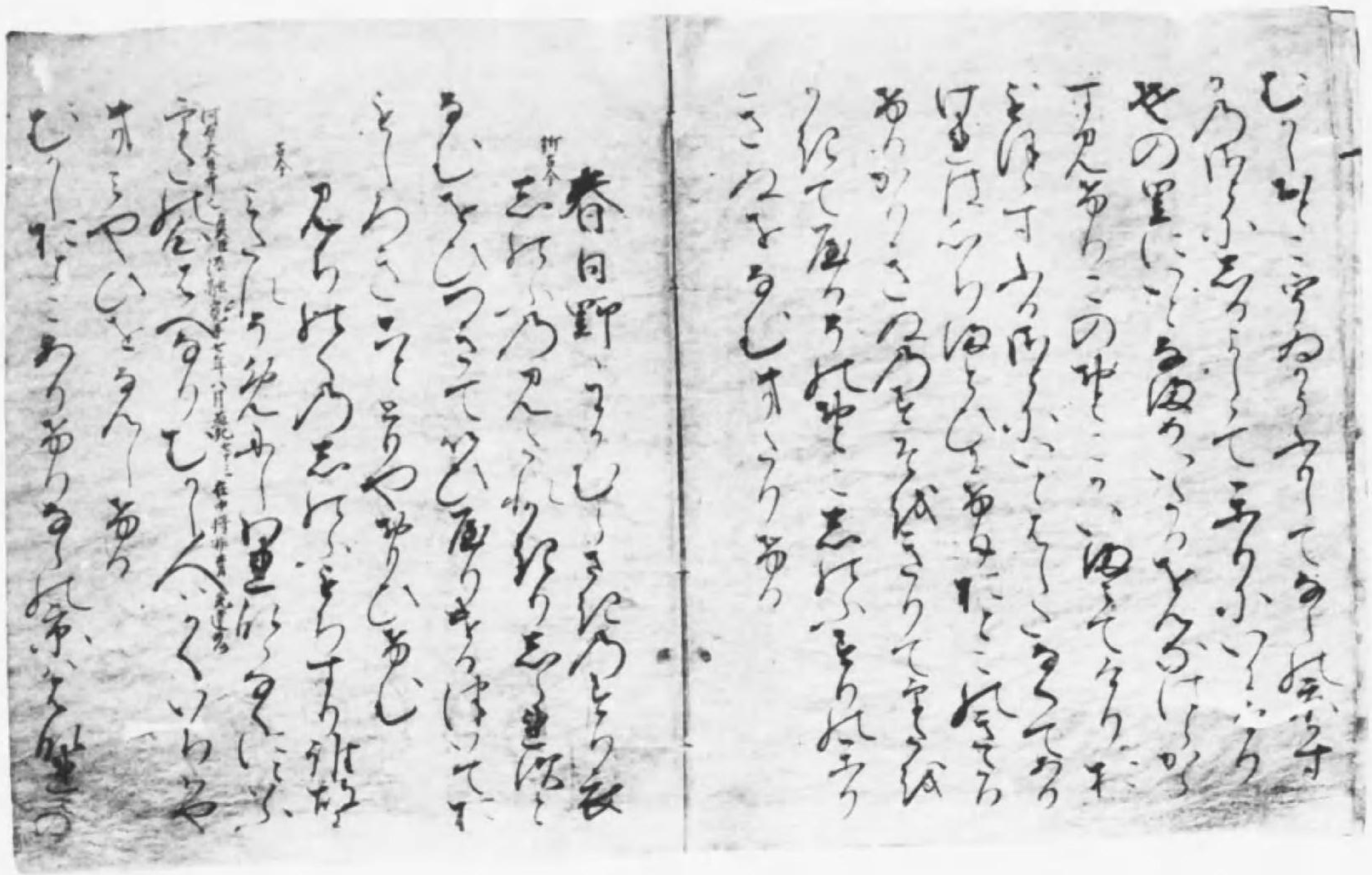


むかしおとこうゐかうふりしてならの京かすかの
里にしるよしゝてかりにいにけりそのさとにいと
なまめいたる女はらからすみけりこのおとこ
かいまみてけりおもほえすふるさとにいとはした
なくてありけれは心ちまとひにけりおとこのきたり
けるかりきぬのすそをきりて哥をかきてやる
そのおとこしのふすりのかりきぬをなむきたりける
新古今
かすかのゝわかむらさきのすりころも
しのふのみたれかきりしられす
となむおいつきていひやりけるついておもしろき
ことゝもや思けん

第二八圖
奈良京物語

七海兵吉氏藏

外題に奈良京物語とあるが、これは冒頭に「むかしおとこうゐかうぶりしてならの京かすかのさとにしるよしゝてかりにいにけり」と見える所から命名されたのであらう。縦七寸五厘、横五寸二分。鳥の子、胡蝶裝。第九十六段の半以下は佚脱す。系統は流布本に屬し、もと爲相の識語を卷末に載せてゐた本であつたことは、本文を比較した結果、略推定することが出來る。卷末を缺くため、傳來・筆者不明であるが、書寫年代は室町中期頃と思はれる。その爲相筆といふ古來の所傳は誤である。今卷頭見開を圖に示す。

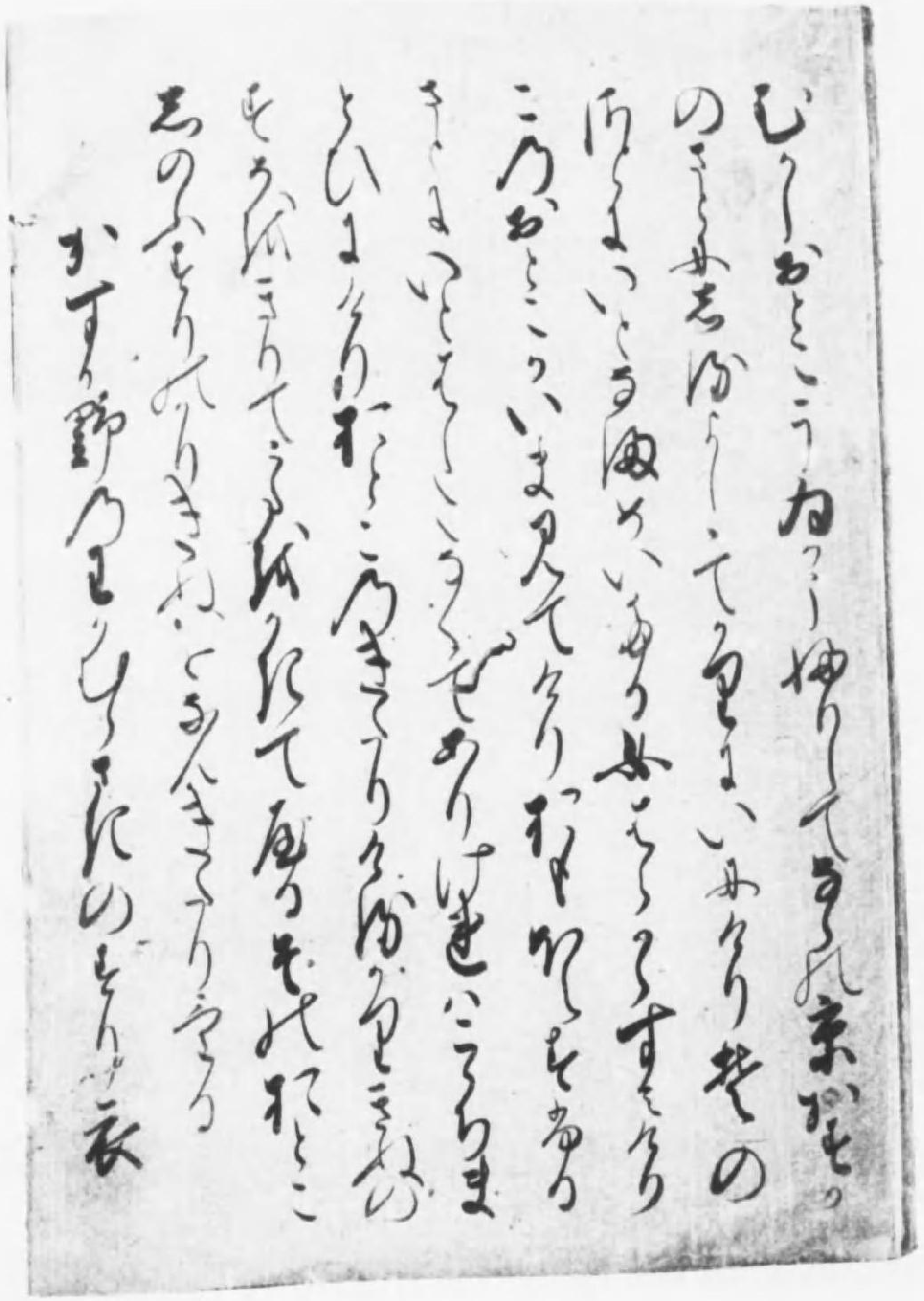


第二九圖

豐原統秋筆本伊勢物語（其一）

架藏

この伊勢物語は豐原統秋自筆と稱せられ、縱七寸九分、橫五寸八分、鳥の子を料紙とする胡蝶裝の一帖である。紙數すべて八十一枚、その中墨附七十九枚。本文の末尾に別筆にて「此物語始終筑後守統秋染弊筆者也」と記したのは、花押によつて烏丸光廣なることを知る。本文の筆者豐原統秋は當時樂家の泰斗、和歌を三條西實隆に學び、大永四年七十五にして卒した。本書には奥に武田本並に流布本の奥書を載せてゐるが、これ等は本文と同筆にあらず、後世の追記であらう。

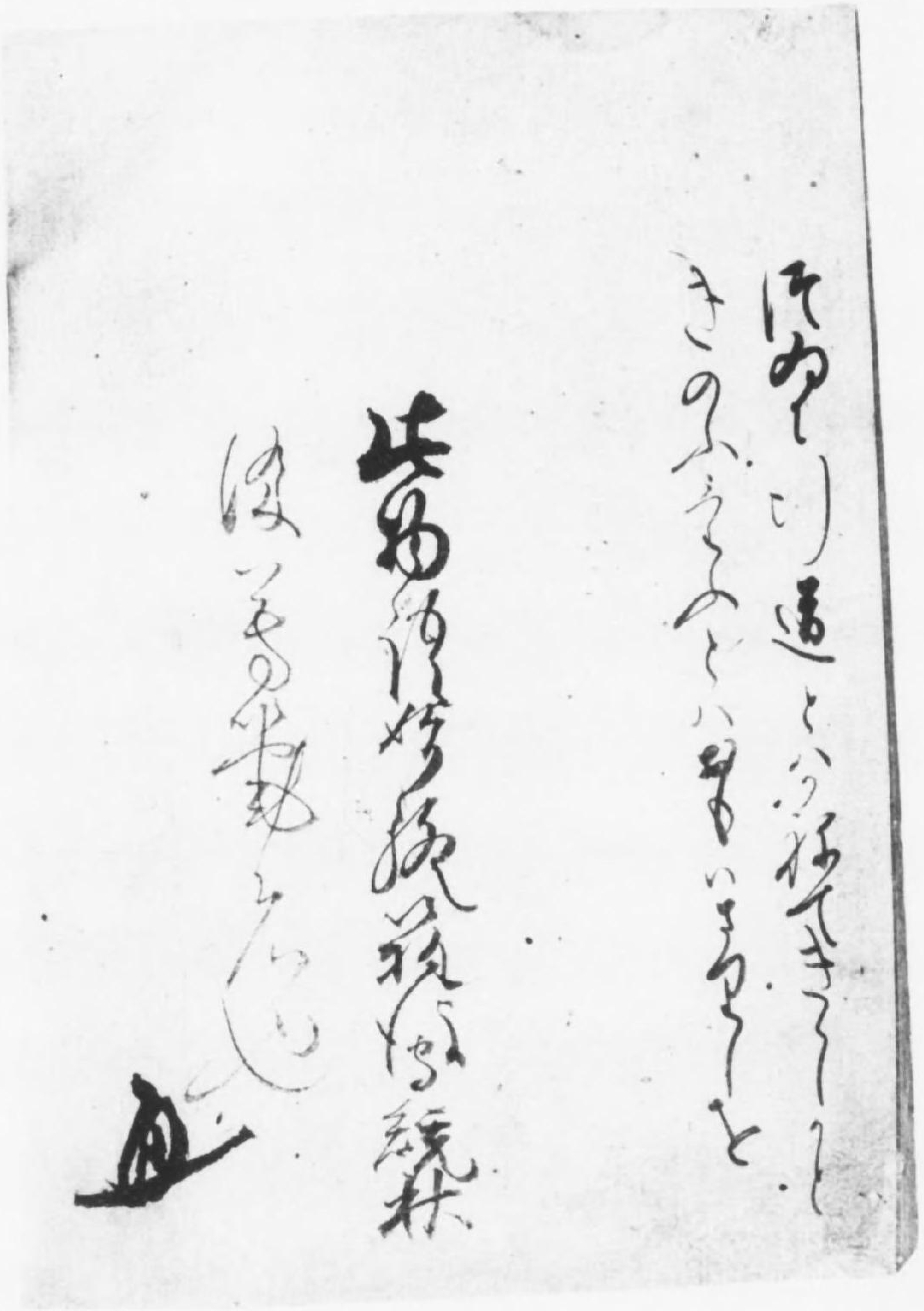


むかしおとこうゐかうふりしてならの京かすかの
さとにしるよしゝてかりにいにけりその
さとにいとなまめいたる女はらからすみけり
このおとこかいまみてけりおもほえす
ふるさとにいとはしたなくてありけれは心ちま
とひにけりおとこのきたりけるかりきぬの
すそをきりて歌をかきてやるそのおとこ
しのふすりのかりきぬをなんきたりける
かすか野のわかむらさきのすり衣

第三〇圖

豐原統秋筆本伊勢物語（其二）

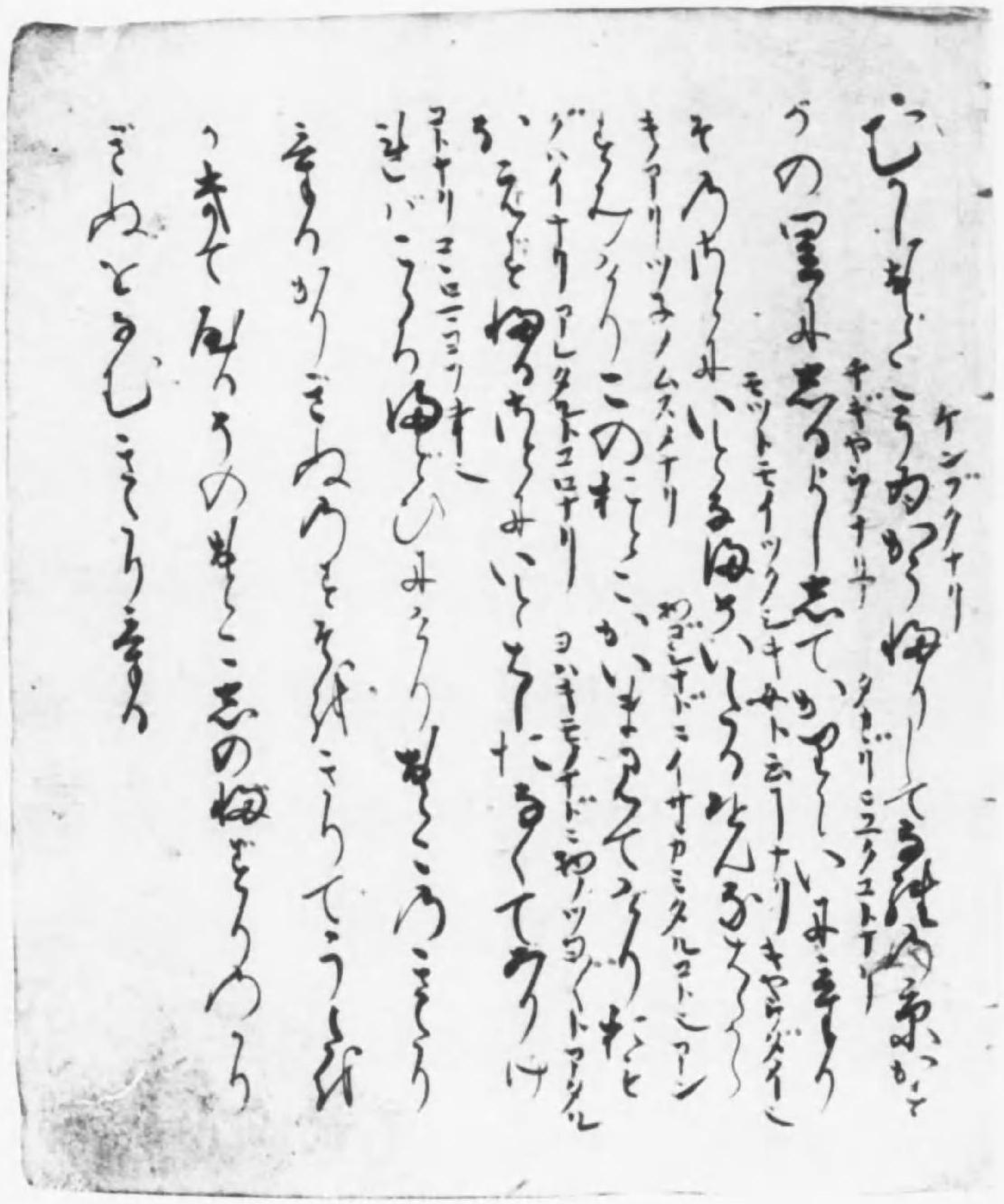
架　藏



第三一圖

片假名書入本伊勢物語　架藏

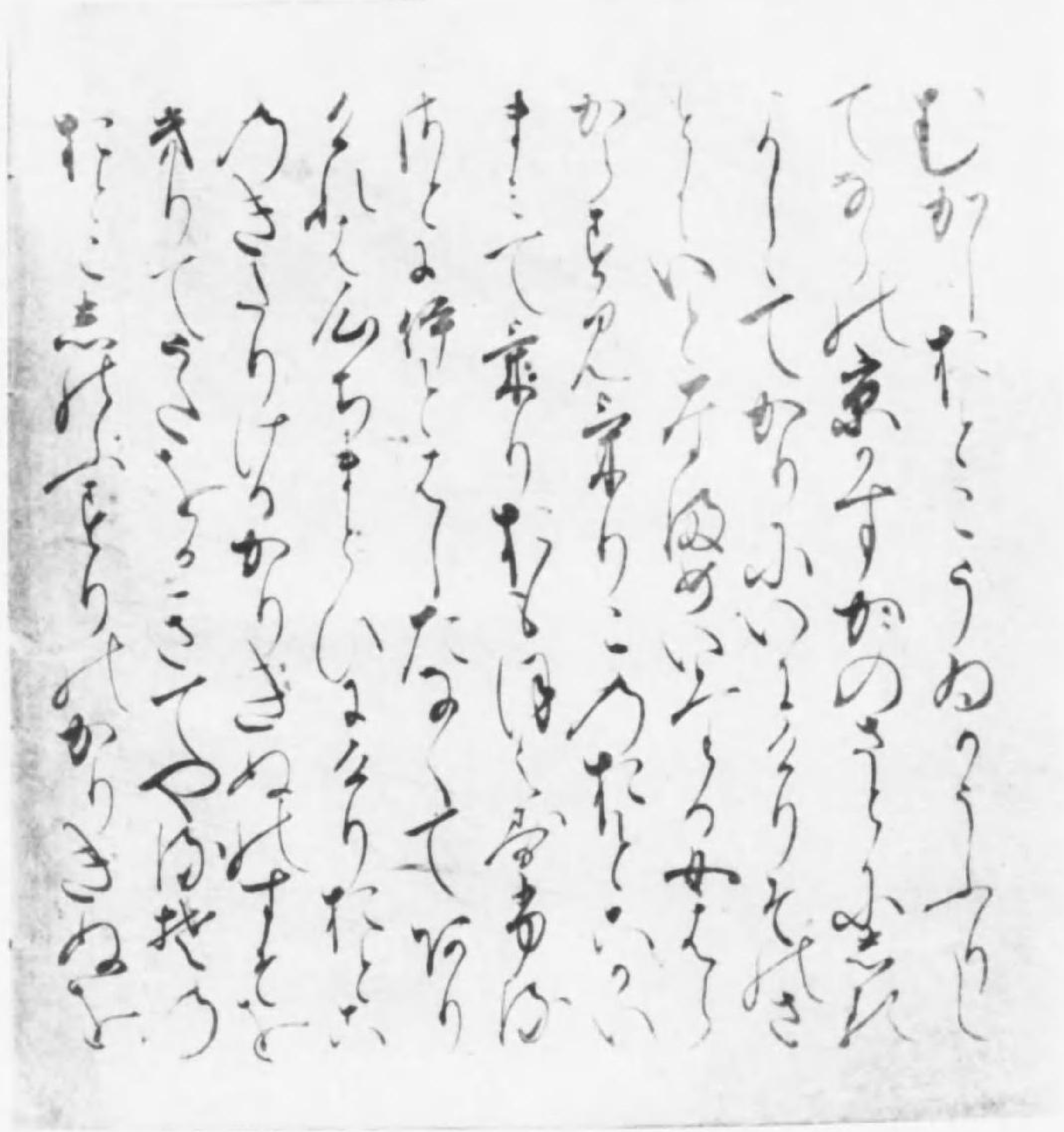
本書は縱六寸一分、横五寸五分、鳥の子、胡蝶裝の書入本である。奥書なく、筆者も不明であるが、本文校合の結果、流布本系統に所屬せしむべき本であることが分る。　書寫年代は恐らく室町中期より末期に至るまでのものか。　本書の特徴は、むしろ行間に夥しく書入れた註釋にある。　この書入は勢語註釋史研究の資料として注意すべきものである。　但しその註の系統は大體二條流のそれであらうと思はれる。



第三二圖　飛鳥井雅俊筆本伊勢物語

架藏

本書は縱橫共に五寸二分の桝形、鳥の子、胡蝶装の册子で、本文を一面十一行に書き、墨附すべて七十八枚。書寫の態度は嚴密であるが、稀に誤寫がないでもない。本文の系統は流布本のそれである。奥に「此一帖以相傳之本爲法橋專存遂書寫功畢　明應丁巳孟冬下旬　羽林藤雅俊」とある。書寫の時代は明應か、或は下つてもあまり遠くない頃であらうと思はれる。今卷頭一葉を圖版として掲載することとした。

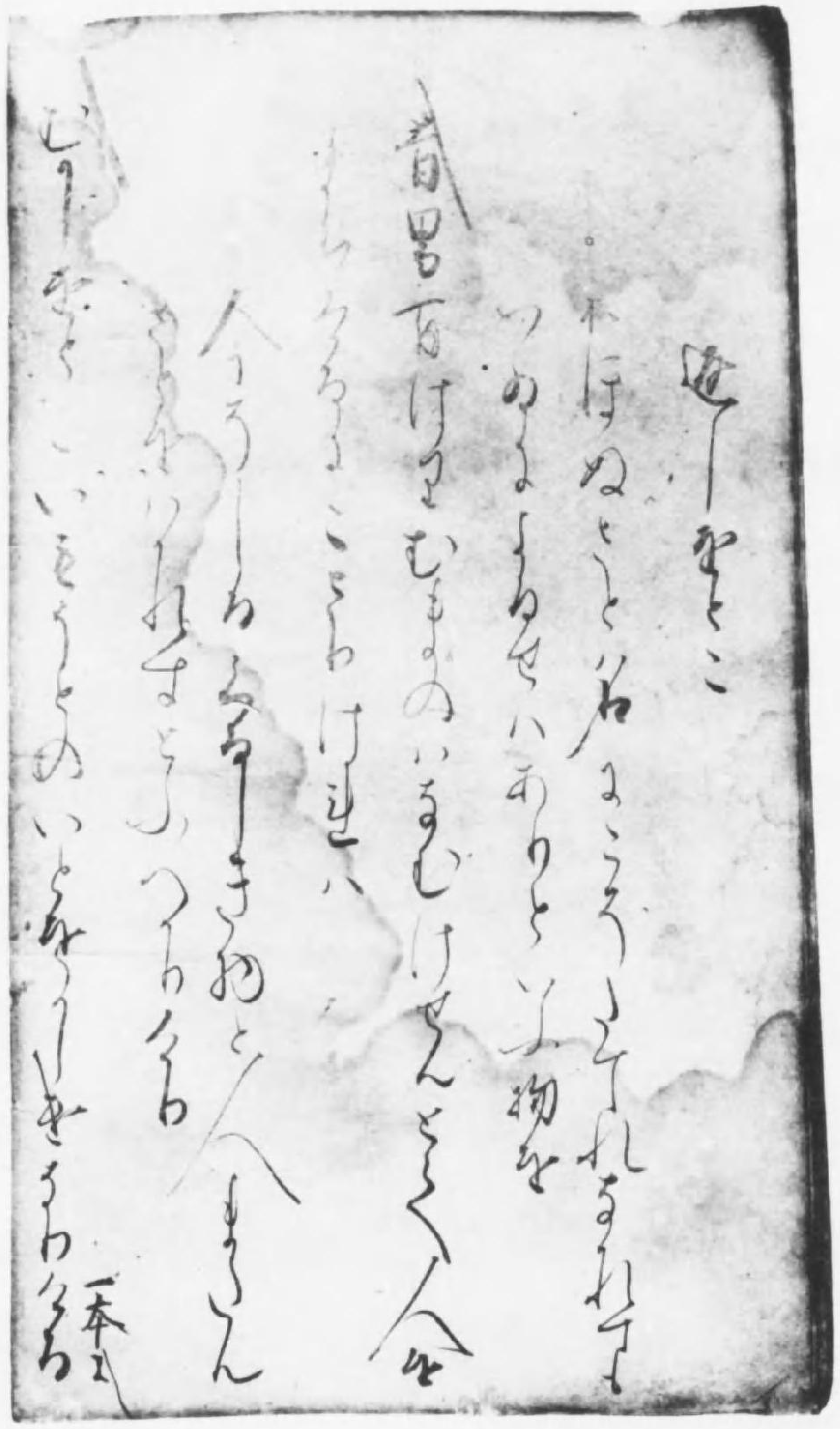

むかしをとこうゐかうふりし
てならの京かすかのさとにしるよし
してかりにいにけりそのさ
とにいとなまめいたる女はら
からすみけりこのをとこかい
まみてけりおもほえすふる
さとにいとはしたなくてあり
けれは心ちまとひにけりをとこ
のきたりけるかりきぬのすそを
きりてうたをかきてやるその
をとこしのふすりのかりきぬを

第三三圖

傳爲相筆本伊勢物語（其一）

七海兵吉氏藏

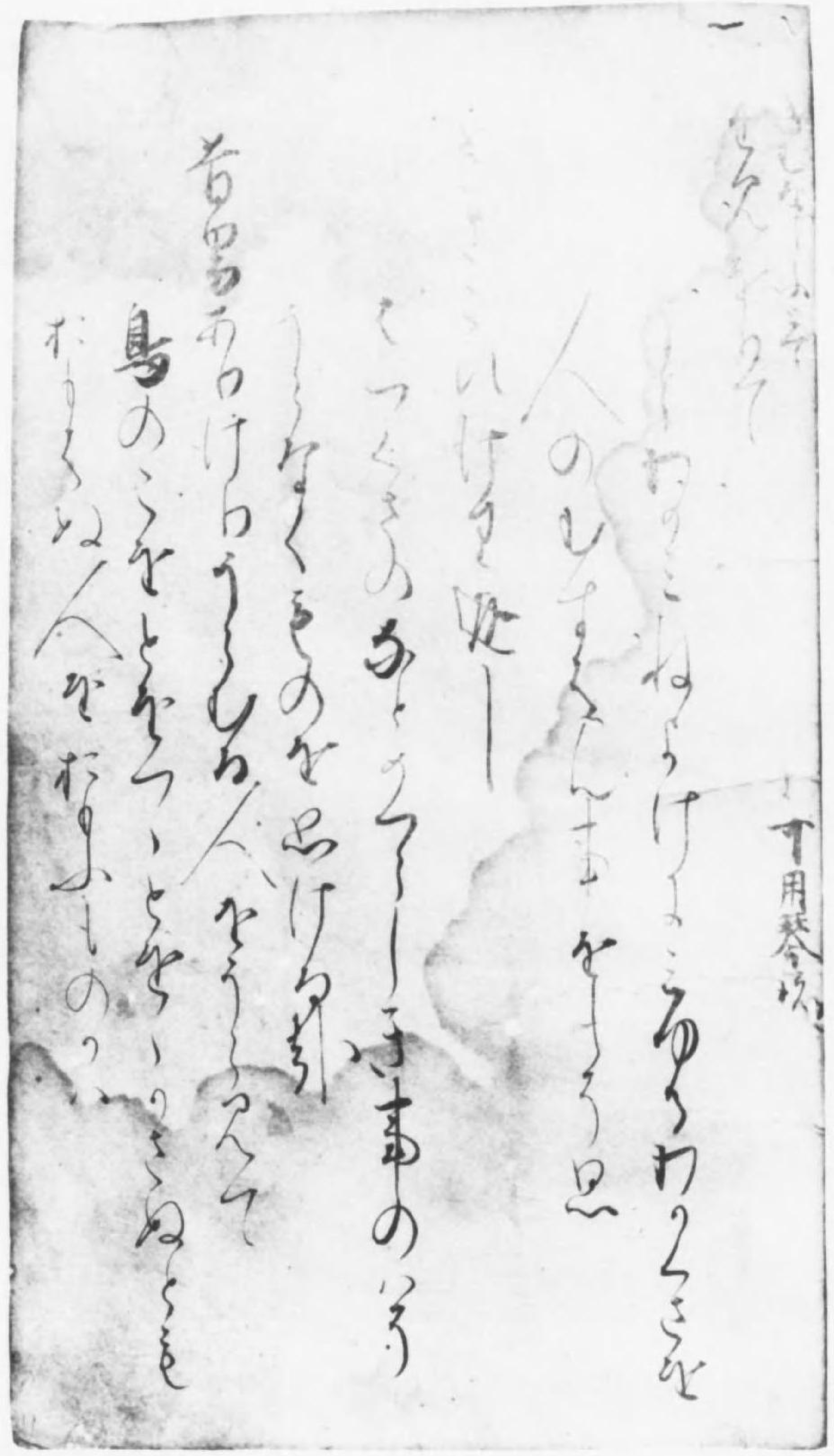
縱八寸五分、横五寸二分。古色深き鳥の子紙を料紙とする胡蝶裝の册子である。筆者につき古筆家の極札には冷泉爲相とあるが、その徴證たるべき何物もない。むしろ高野辰之博士藏源親行筆新古今集のそれに酷似したる書風を示す。書寫年代の鎌倉初期に遡るべきことは、本の形狀・書風・墨色・紙質・手ずれ・破損の跡等によつて疑ふ餘地なく、恐らく現存勢語諸本中、本書以上に古い寫本は稀であらう。本書の特徴の一つとして、まま「イ」又は「一本」との校合が施されてゐるが、今その重要な一例を圖版として示すこととした。



第三四圖

傳爲相筆本伊勢物語（其二）

七海兵吉氏藏

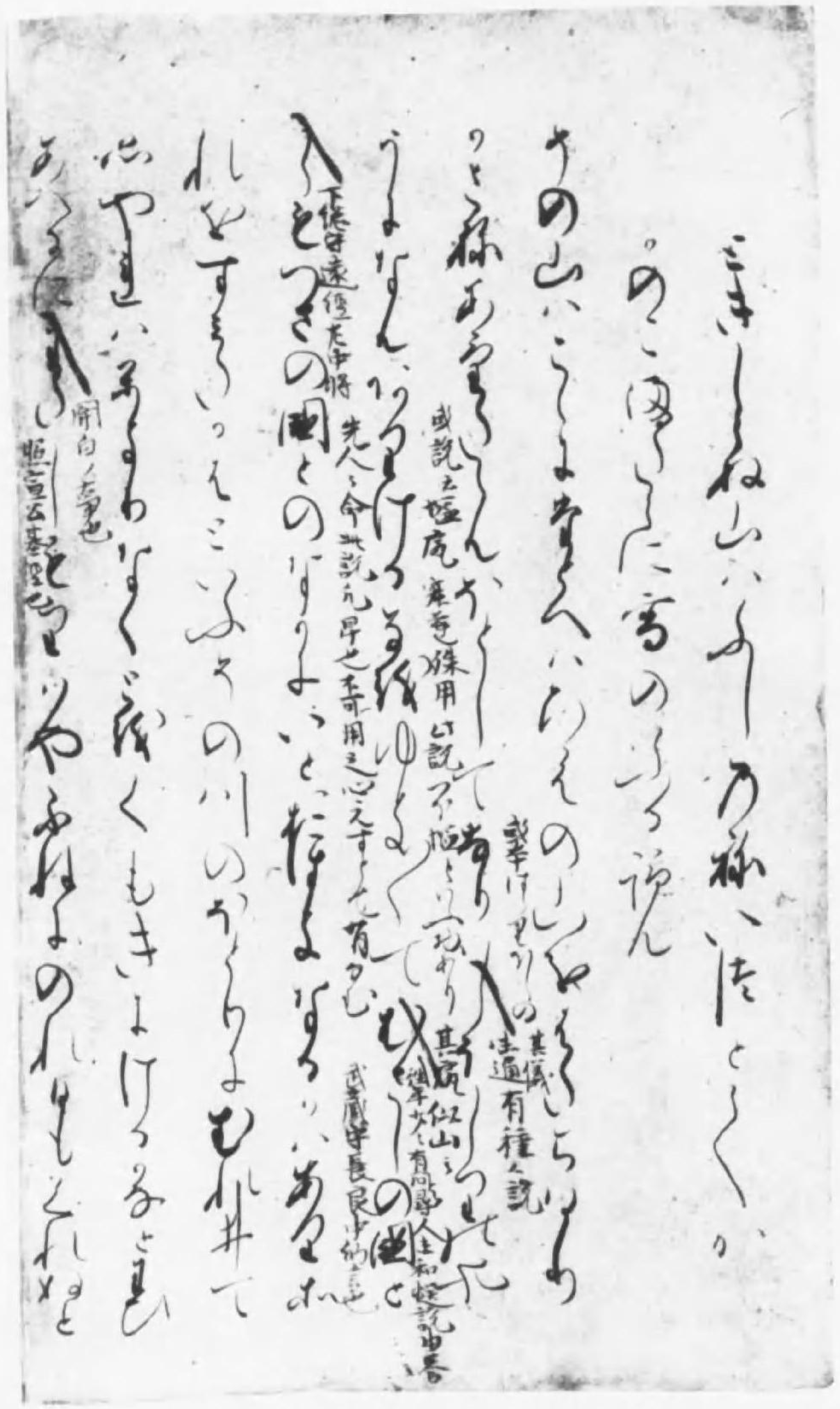


第三五圖

傳慈鎭・爲家兩筆本伊勢物語（其一）

須田竹次郎氏藏

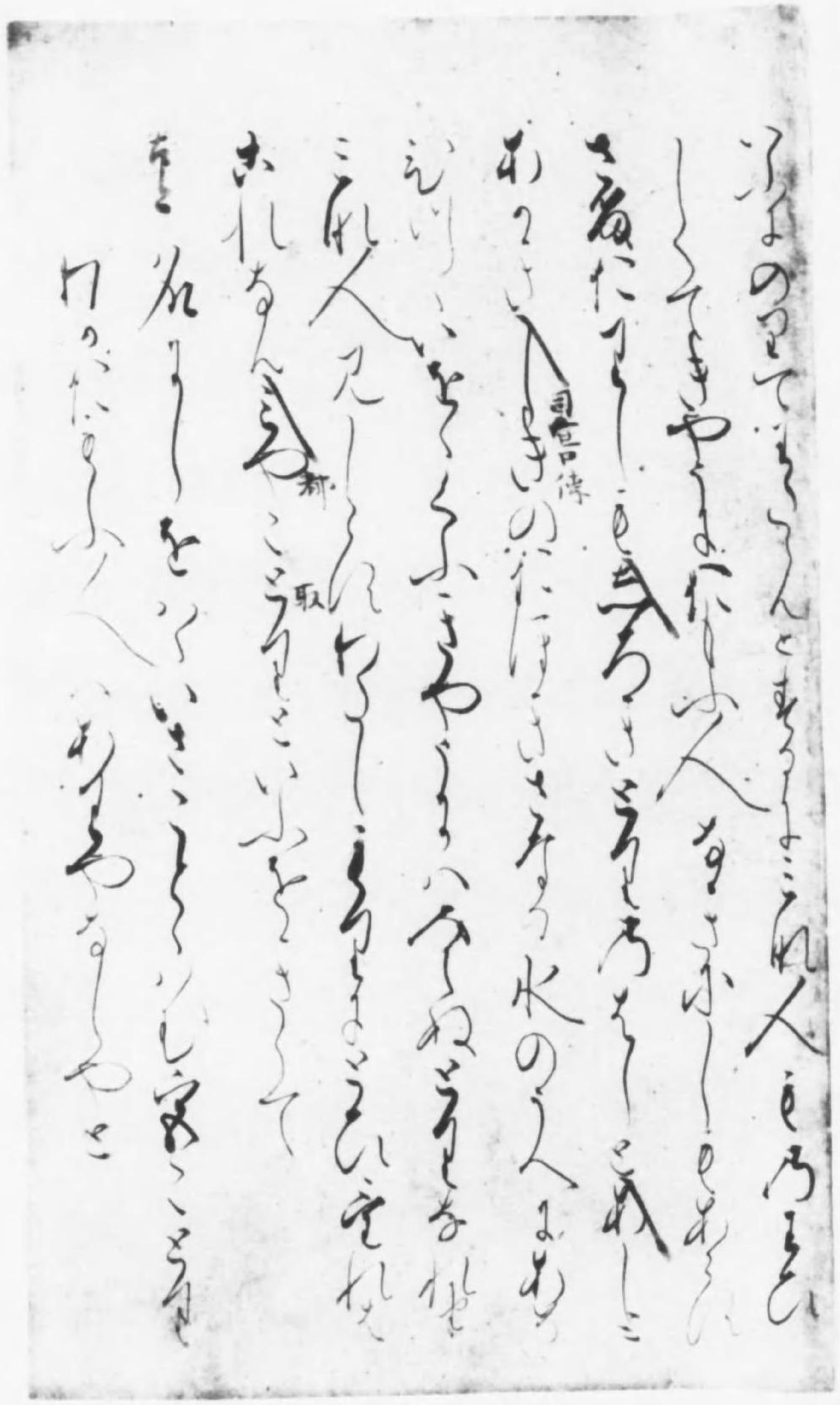
縱八寸三分、横五寸二分五厘。裝潢は鳥の子胡蝶裝。古筆了仲の鑑定によれば、慈鎭・二條爲家兩筆となすが、確證は全くない。しかし鎌倉末期の書寫に係るものなることは疑ない。本文は古本系統の傳爲相筆本伊勢物語に最も近似す。卷中みせけちとせる部分の多いのは、定家本系統の本をもつて校合した結果であらう。又本書の特色として朱筆の註釋が多いが、これ等はすべて古註に屬する。今了仲が慈鎭・爲家筆跡の變る箇所となす部分二葉と、他に一葉とを圖版に收めた。



第三六圖

傳慈鎭・寫家兩筆本伊勢物語（其二）

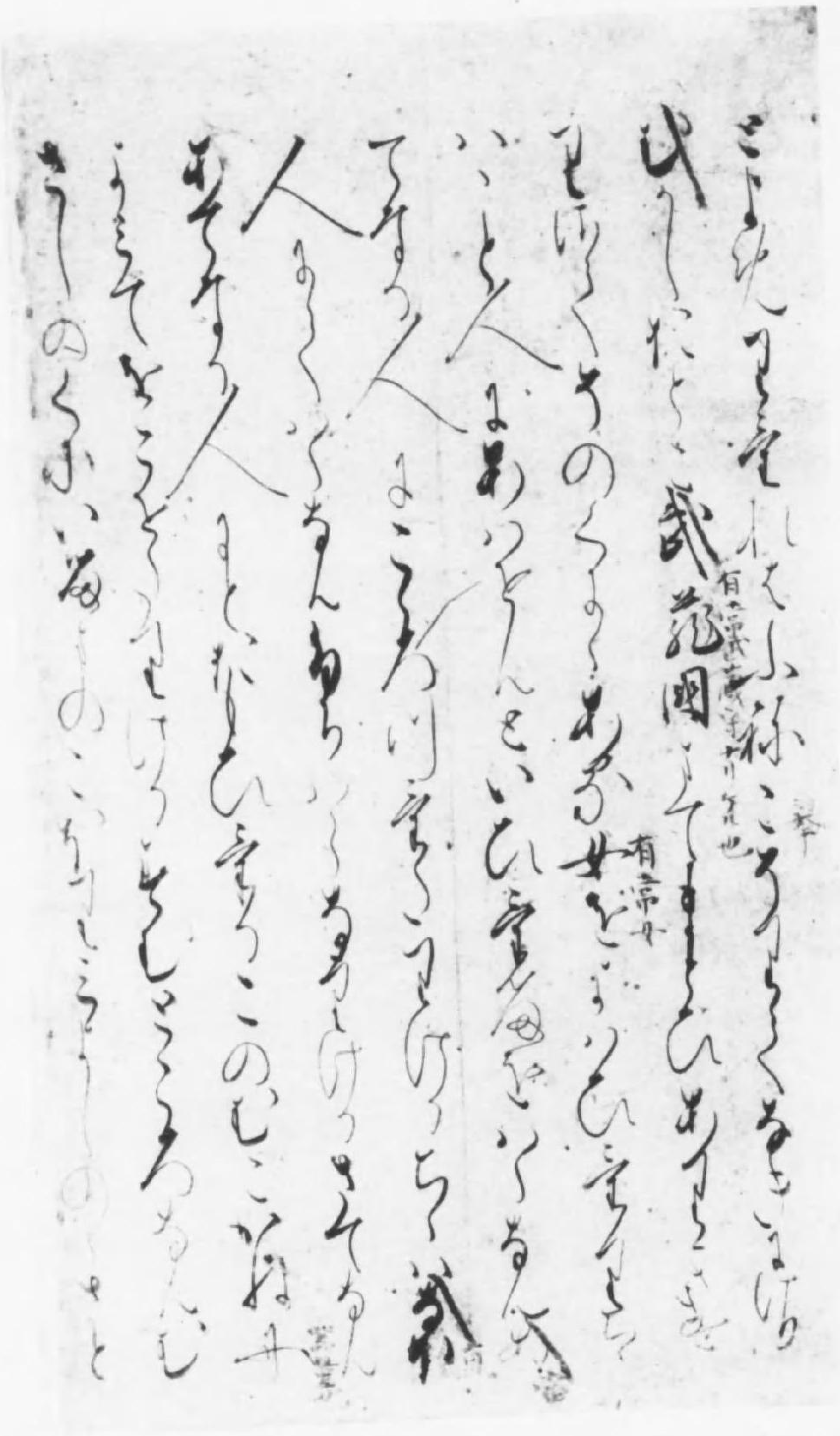
須田竹次郎氏藏



第三七圖

傳慈鎭・爲家兩筆本伊勢物語（其三）

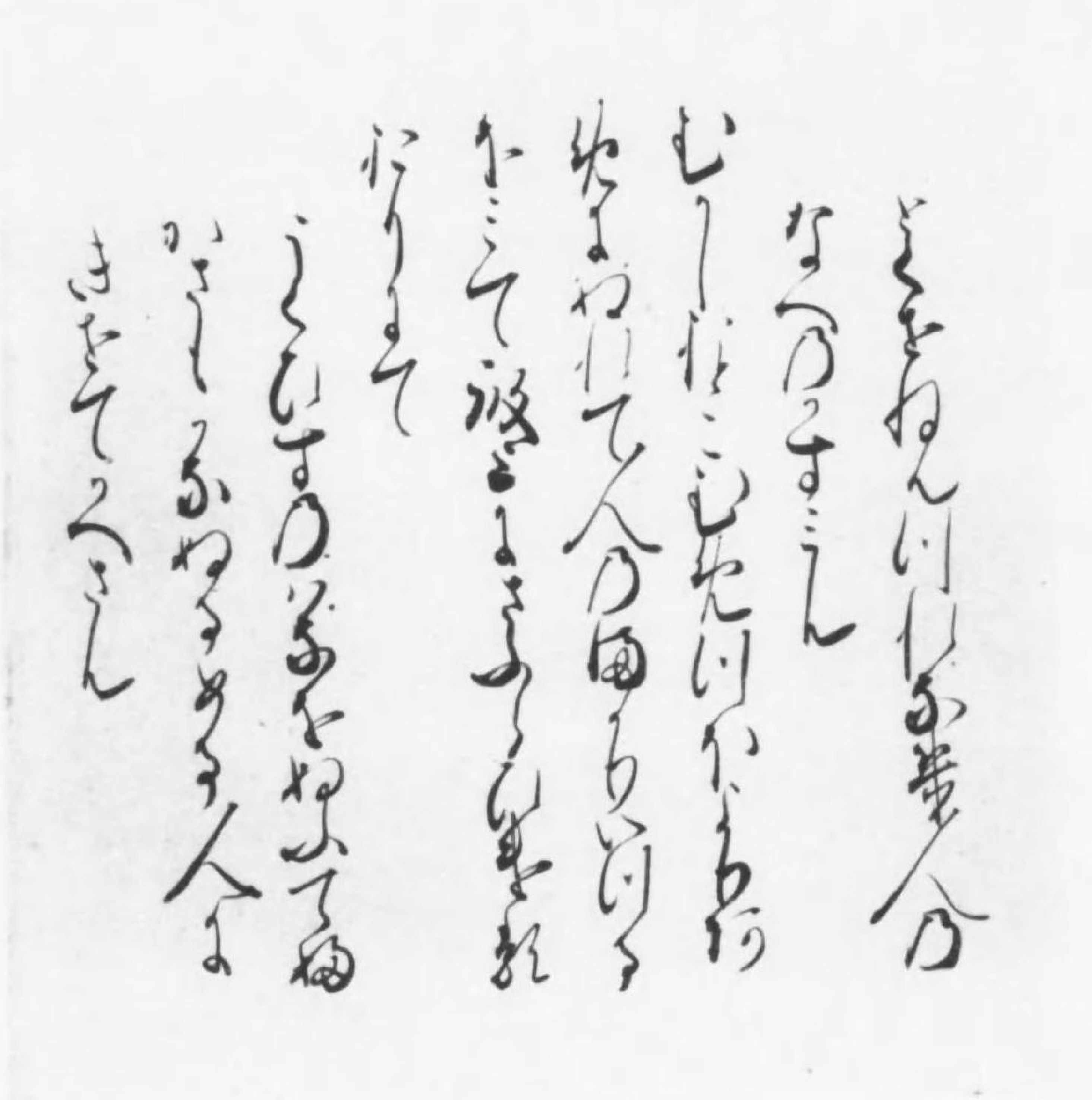
須田竹次郎氏藏



第三八圖

傳良經筆本伊勢物語

守屋孝藏氏藏

縱横共に四寸九分。斐紙を料紙とする桝形、胡蝶裝。仙室の極札によれば、後京極良經筆といふ。併し徴證たるべき何物も存しないのであるから、今その當否は遽に斷じ難いが、書風・紙質等より推して鎌倉末期の書寫となすは學者の説の一致する所である。識語なく、殘闕本であり、傳來また不明であるが、先づ傳爲相筆本・傳慈鎭爲家兩筆本等に近き本文を有する。今古典保存會の複製本により、古本系統諸本に於ける特色の明瞭なる部分一葉を撮つて示すこととした。